

# 真境名安興と沖繩史学の形成

並 松 信 久

## 目 次

1 はじめに	5 歴史書の誕生
2 歴史への関心	6 歴史観の有無
3 沖縄県政への批判	7 郷土文化史の展開
4 歴史学の道	8 結 語

## 要 旨

真境名安興（1875-1933）は明治期から昭和初期における沖縄史研究者である。真境名はその生涯において多くの論考を残し、それらは『真境名安興全集』全4巻にまとめられている。なかでも代表的な著書『沖縄一千年史』は1923（大正12）年に刊行されるが、約50年間にわたって読み継がれ、沖縄史学を代表する著書となっている。しかし真境名には多くの論考や遺稿があるものの、その研究の全貌はいまだ明らかにされていない。沖縄史に関するぼう大な研究業績があるにもかかわらず、研究史上における真境名の位置付け、およびその研究の特徴などが明らかにされていない。本稿は真境名の経歴をたどりながら、その研究の特徴を考察して、沖縄史学が形成されていった過程を明らかにするものである。

真境名は旧制中学校在学中から沖縄史に関心をもち始めている。当初は文学論考などを執筆しているが、徐々に歴史へと関心を移す。当時の<sup>そまやま</sup>山問題に対する沖縄県政の批判という意味で、林政史や農政史などに関する論考を執筆する。そして真境名は県史編纂事業に関わったことから『沖縄現代史』、『沖縄一千年史』という著書を発表する。『沖縄現代史』は沖縄近代史を扱った先駆的な業績であり、とくに教育の項目が詳細に説明されている。一方、『沖縄一千年史』は沖縄の通史として先駆的な業績であり、その特徴は実証的であると同時に網羅的でもあり、沖縄史を研究する際の参考書あるいは百科事典とされる。したがって『沖縄一千年史』は史実を記述したものであって、史論を展開したものではないとされている。

しかし真境名に歴史観がなかったわけではない。真境名の沖縄史学の特徴には主に五つの点がある。第一に方言（沖縄語）への関心の深さがみられる。第二に沖縄史を多角的にとらえようとしている。第三に現在では失われてしまった貴重な史料を利用している。第四に家譜を広く引用している。第五に古老から直接、聞き取り調査を行なっている。これらの特徴から、真境名の歴史観を考えれば、現在の問題意識から歴史を総合的な視点でとらえたこと、さらに歴史の主体を重視したことになる。この歴史観は真境名の沖縄史学が郷土、つまり沖縄に立脚したものをめざそうとした過程で生まれたものである。

沖縄史学を展開した東恩納寛惇（1882-1963）との違いは、東恩納は東京帝国大学で歴史理論を学び、実証主義的な方法を身に付けて、沖縄史に取り組んだ。この一方で真境名は歴史理論を学ぶ機会をほぼもたなかったために、史料に関して徹底的に厳密性を追求し、その総合性を考慮に入れた沖縄史学を展開した。この点が真境名の沖縄史学を支えたのであって、歴史理論が支えたわけではなかったといえる。

キーワード：真境名安興、沖縄史学、歴史観、『沖縄一千年史』、東恩納寛惇

## 1 はじめに

真境名安興<sup>まじきなあんこう</sup>（1875–1933、以下は真境名）は沖縄史の研究者として著名な人物である（真境名は笑古（しょうこ）と号した）。真境名は生涯にわたって多くの論考を残しているが、それは真境名の経歴と大に関わっている。まず経歴をたどりながら、どのような論考が発表されたのかを概観する。

真境名は1875（明治8）年に首里の士族の家に生まれる。1891（明治24）年に沖縄県尋常中学校（後の県立一中）に入学する。中学校の同期には伊波普猷（1876–1947、以下は伊波）、照屋宏（1875–1939、以下は照屋）、漢那憲和（1877–1950、以下は漢那）、屋比久孟伝（1878–1941、以下は屋比久）らがいた。真境名は「沖縄中学ストライキ事件」の首謀者のひとりとして、ストライキ宣言などを草したために、退学処分が付される。しかし事件の終結後に復学を許され、1897（明治30）年に中学校を卒業している。

卒業後の経歴は、琉球新報社記者、沖縄毎日新聞社記者、沖縄朝日新聞社客員などを経て、1901（明治34）年に沖縄県首里区書記となる。その後、中頭郡書記、那覇税務管理局、那覇税務署、宮古税務署などでの勤務を経て、1904（明治37）年に沖縄県属となる。そして1914（大正3）年に沖縄県史編纂委員、1924（大正13）年に県立農林学校心得となり、翌25（大正14）年に、伊波の後を受けて県立沖縄図書館の第二代館長となる。そのかたわらで文化・学術団体を主宰し、後進の指導にあたったが、1933（昭和8）年に業なかばにして逝去した。

真境名は1899（明治32）年頃から沖縄に関する小論を『琉球新報』紙に発表して、その初期には主に文学や文化史に関する研究成果を残している。1899（明治32）年に「雨夜の寝ざめ」（11回連載）、「燈下漫録」（5回連載）、「展覧会に於ける二日間」（5回連載）、「秋信録」（7回連載）、翌1900（明治33）年に「沖縄歳時記」（19回連載）、「続雨夜の寝ざめ」（3回連載）を発表するなど、精力的な執筆活動をしている。しかしその後、上記のように職務上の移動が激しくなり、執筆活動は低下する。

1904（明治37）年に沖縄県属となり、県庁の農商課、林務課、知事官房文書係などに着任した頃から、再び執筆活動を復活している。復活したといっても、文学や文化史に関する執筆ではなく、1911（明治44）年に刊行された『沖縄教育』（第64号）の「偉人」特集の執筆にかかわった頃から、産業経済史関係の論考が多くなる。たとえば、同年の『沖縄毎日』紙に「琉球偉人伝—沖縄産業の二大恩人・儀間真常と野国総管」（5回連載）、1913（大正2）年の『琉球新報』紙に「蔡温時代の林政」（5回連載）、翌年の『琉球新報』紙に「本県造林の起源及び興廃の史的観察」（7回連載）を掲載している。

真境名は産業経済史に対する関心だけではなかった。真境名は博覧強記を誇った研究者であり、その研究は歴史を中心に文学、芸能、民俗、産業など多方面に及んでいる。真境名が執筆した点数は、新聞に90点余、雑誌に約20点、記念誌や他著（序文などを含む）に約10点で

ある<sup>1)</sup>。真境名が研究の真価をいかに発揮した代表的な著書が『沖縄一千年史』（1923年刊）であり、戦前における沖縄史研究の記念碑的な著書とされている。

真境名には多くの論考や遺稿があるものの、その研究の全貌はいまだ明らかにされていない。沖縄史に関するぼう大な研究業績（『真境名安興全集』全4巻）があるにもかかわらず、研究史上における真境名の位置付け、およびその研究の特徴などが明らかにされていない。わずかに高良倉吉「真境名安興と東恩納寛惇」（沖縄県編『沖縄県史 第5巻各論編4文化 上』、沖縄県、1975年、862～8ページ）や名嘉正八郎「真境名安興小論」（『新沖縄文学』、第33号、1976年、35～44ページ）によって、研究の一端が明らかにされているにすぎない。

同じ沖縄史研究の東恩納寛惇（1882-1963、以下は東恩納）は、この真境名（東恩納は真境名を公的には「笑古兄」と称した）について、

笑古君が博識であつたことは、その著一千年史を見ても首肯出来る。一千年史には琉球史研究に必要なだけの参考書は殆んど網羅されてゐると云つてよい。沖縄にゐてよくあれだけの資料を渉獵することが出来たと敬服の外はない。而して資料の取扱について、徹頭徹尾平静で、独断のない事は一層敬服に値する。（中略）吾々同学の好しみから謂ふと笑古君は永い間よく留守番をして呉れたと思ふ。伊波君や吾々は多分は県外に在つて出稼をしてゐたので、笑古君に比べると苦しい事も楽しい事もそれは多かつたに違ひない。笑古君は始終内にばかり踏み止まつてゐたので、安気な所もあつたであらうが、その代りにはうるさい事も聴き又面倒な事も見たであろう。大抵な人であると、倦怠して身も心も荒んで了ふ事は知れ切つて居る。然るに我が笑古君には一度も屈托の色を見せず、さらばと云つて焦燥の気分もなく、常に悠々として壺中の天地を楽しみ、笑つて永訣の二字を清書する事が出来た。此心境だけでも常人の及ぶ所ではない<sup>2)</sup>。

と真境名の臨終直後に語っている。東恩納によれば、真境名は伊波や東恩納のように沖縄から出ることがなかったものの、沖縄にあって資料蒐集と地道な研究を続けていた。その研究は、東恩納がいうように「徹頭徹尾平静で、独断のない」ものであった。他の多くの研究が当時の沖縄が置かれた立場を否応なく意識したものとなっていたのに対して、できるだけ客観性を保った研究を続けたようであった。

本稿では、これまであまり知られることのなかった真境名の研究業績を検討することによって、真境名がめざした沖縄史学の形成について解明していきたい。筆者は前稿において東恩納による沖縄史学の展開を考察したが、本稿においては、東恩納による沖縄史学との違いも追っていく<sup>3)</sup>。これによって、沖縄の地元でほぼ独学で歴史を学んだ真境名と、東京帝国大学で歴史学を学んだ東恩納との、両者の違いが明らかになると同時に、ほぼ同時代に活躍した両者が、沖縄史学によって何を明らかにしようとしたのかが明らかになると考えている。

両者の歴史研究の違いについては、沖縄史研究の比嘉春潮（1883-1977、以下は比嘉）によれば、「今まで東恩納氏、真境名氏、伊波氏、仲原氏が沖縄の歴史を書いているが、その中で歴史学を系統的に研究したのは東恩納氏と仲原氏で、そのほかは書いていくうちに歴史の方法をつかんでいったので、私もまたその一人である。系統的に歴史学を勉強したのではなく、人の書いたのを読んでいる間に知っていった方だ」<sup>4)</sup>ということである。ここで仲原氏とは仲原善忠（1890-1964、以下は仲原）のことであり、比嘉によれば、王統にしたがって時代を区分していない例外的な歴史研究者である。沖縄史学を形成していく上で、その系統性は大きな問題であるが、同じ沖縄史研究においても、あらかじめ方法論をもっていた東恩納と、方法論をもたなかった真境名とは自ずと違いがあったはずである。

以下では、真境名の経歴にしたがって、沖縄史学が形成されていった展開を追っていく。本稿では主に真境名安興『真境名安興全集』（全4巻、琉球新報社、1993年）を資料として利用する。なお本稿の引用文には、不適切な表現が含まれている部分があるが、史実を重視する立場から、あえて訂正を加えていない。さらに引用文中の句読点については、読みやすくするために一部、筆者が付け加えた部分がある。

## 2 歴史への関心

真境名は沖縄県尋常中学校の在学中から、すでに『学友会雑誌』に沖縄史に関する小論を発表している<sup>5)</sup>。この雑誌発刊のきっかけは、真境名が1894（明治27）年5月に関西地方を修学旅行で訪れた際に、京都の旧制第三高等学校での歓迎会に出席した折に、雑誌刊行について触発されたことであった<sup>6)</sup>。真境名らは修学旅行から帰るとすぐに『学友会雑誌』の創刊号を発刊する。

この時の体験は、その後の真境名の運命をも変えてしまう。真境名は当時、在籍していた中学校の児玉校長が、英語廃止を打ち出したことに対して反発していた。京都で向学心を刺激された真境名らは、さらに激しく反発するようになる。当時の『琉球新報』紙は、「英語科を廃そうとするのは、とりもなおさず沖縄人に高等教育を受けさせまいとするのだ。沖縄を植民地扱いにする」ものであると、児玉校長を非難した。真境名らは、児玉校長の言動は学生が高等教育を受ける必要がないことを意味すると受け止めた。両者の対立が深まるなかで、下国教頭の仲介によって折衷案が出され、結局、英語は随意科目となった<sup>7)</sup>。しかし1895（明治28）年にその仲介に入った下国教頭に休職が命じられたため、児玉校長に対する反発が再燃する。

5年生の主だった学生が校長らの辞職勧告を行ない、その翌日に漢那、照屋、屋比久、伊波、真境名の5名に対して、事件の首謀者ということで文部省令によって退学が命じられる。これに対して真境名らは「退校願につきて」と題して、『琉球新報』紙に自らの主張を投稿する。伊波は文章を書いた真境名について、

真境名君の為に特筆すべきことは、同君が全校きつての文章家であつたことです。自分などはどうしてまあそんな名文が書けるかといつも羨んでみました。ストライキの時の宣言を漢那君が立案したものを、同君が一气呵成に書上げて、全県下を驚かした(中略)、口語文が勢力を得た頃、同君は口語で書くよりも、文語で書くのがずっと早いので、先づ文語で書いてから、口語に直したこともありました<sup>8)</sup>。

と記している。

結局、この一連の事件の結末は、翌1896(明治29)年に児玉校長が転任し、学生については首謀者以外の150名が復学した。照屋は二度目の受験で旧制第一高等学校へ、伊波は三度目の受験で旧制第三高等学校へ入学する。屋比久と真境名は中学校に復学する。真境名は1897(明治30)年に中学校を卒業し、その文章力を買われて琉球新報社の記者となる。

東恩納は、その後の真境名の「研究」に対する関心や、その姿勢について、

真境名君は、一生を通じて間断なく研究を発表したにも拘らず、随感随想と云った風の閑文字は殆ど書いた事がなかった。彼の仕事は、史料蒐集と、その究明とに殆んど終始したようである。従って彼の学問に対する態度は飽くまでも客観的であった。随筆を書かなかつたのも、このためであろう<sup>9)</sup>。

と回想している。さらに、

真境名君は、詩にも歌にも趣味を有っていたが自ら作るよりも、古人のを鑑賞するのが好きであった。詩にしても歌にしても又文章にしても、筋が通って危気がなかった。

というように、真境名が単に詩歌に関心があっただけでなく、自ら創作していたことにも触れている<sup>10)</sup>。真境名といえば、歴史研究者としての側面が強調されることが多いが、このような側面ももっていた。もっとも詩歌への関心は、真境名が歴史を研究するうえで大いに役立つことになる。

東恩納だけでなく、伊波も歴史研究者としての真境名を評価する。伊波は1910(明治43)年に沖縄県立図書館が設立されるとともに、その館長を囑託される。その際、沖縄県庁から約5千冊の琉球史料が移管されているが、その整理にあたって伊波は真境名に協力を依頼している。伊波は真境名が有能で、漢学に関して「生き字引」のような存在であったと評価するとともに、

真境名君は、実に死に至るまで何物よりも書物を愛して、一生を送つた学徒といつても、

過言ではありますまい。家族が船越君に話したところによると、朝から晩まで、書物を手から放したことがなく、それでもなほ飽き足らず、床に這入つてまでも手放さずに、そのまま寝つくことが多かつたといふことです<sup>11)</sup>。

と回想している。伊波も東恩納と同様、真境名について史料を重視する研究者ととらえ、その能力を高く評価していた。

真境名は1914（大正3）年頃から盛んに漢詩を発表している。この漢詩の創作は歴史への関心に直接的なつながりはもたなかったが、真境名自身は漢詩を少なくとも学問の一分野と考えていたようである。真境名による漢詩に関しては、多くの証言が残っている。東恩納は「私等下級生は上級生に英語数学国漢等の稽古を付けて貰つてゐたが、その中で真境名君の漢文だけが本物であつたやうに、今になつて回想される」<sup>12)</sup>と書いている。伊波も「生き字引」と評しているように「同君の漢学の力を十分認めてゐた私は、難語難句にぶつゝかる都度同君に解釈して貰ひました」<sup>13)</sup>と語っている。新城安毅（真境名の長男）は「一番よく気があつたのは末吉麦門冬さんや仲里竹亭さん等で伊波普猷さん、儀間泉南さんもよく来られて、漢学詩文の研究論に夜をすごしていました」<sup>14)</sup>と語っている。真境名の場合、漢詩のきっかけは気の合う仲間との研究成果として生まれたものようであり、とくに当時の沖縄漢詩壇に加わって活動するということにはなかった。このために真境名の漢詩は単独で発表されたものが多い。

真境名の漢詩への関心は、歴史への関心につながっていた。そして、その関心は当時の沖縄の社会情勢に対する関心でもあった。真境名は1899（明治32）年1～2月に「雨夜の寝ざめ」、さらに1900（明治33）年7～8月に「続雨夜の寝ざめ」という琉歌に関する文学論考を発表している<sup>15)</sup>。これについて真境名に寄せられた評価は、

古人を友とし濁世を逸脱して無垢の境に遊び、世を怨みず人を誹らず高踏勇退屈原の世をかこち、兼好の娑婆を厭ひし、それにもあらねど其心ばえのほどもほの見えて、いつしか恋しう慕はしう思はるゝなり。氏の手すさびの続雨夜の寝ざめは文章流麗、いつしか氏の気風もあらはれ万緑叢中紅一点ともいひつべし、あはれ如何なる人ならん如何に世を忍び玉ふ人ならんかと、名さへ承はらば訪ひもし尋ぬもしてんと思ふめれど、さすがに世を憚り玉ひてや匿名し笑古となされしこそ本意なきはさなれ<sup>16)</sup>。

とされる。この評価によれば、日清戦争の帰趨によって「濁世」となった沖縄にあっても、「無垢の境」に遊べる真境名を讃えている。世間の動きとは無関係に、自らの関心事に没頭できる真境名に敬意さえ払っている。これは東恩納が真境名のことを「黙々として書斎の人で、世間的権勢とは没交渉であつた」と評したことに通ずるものでもあった。しかしながら真境名は社会情勢とは無縁に、琉歌の文学論に没頭していたのであろうか<sup>17)</sup>。

「雨夜の寝ざめ」と「続雨夜の寝ざめ」は、確かに琉歌に関する文学論考であったものの、真境名が取り上げている琉歌を詠んだ人物をみれば、単なる文学論考ではないことがわかる。たとえば、具志頭親方蔡温、与那原親方良矩人、漢那庸森など、その功績において沖縄史では必ず引用される人物が取り上げられている。これらの人物は歴史上の偉人としてというだけでなく、近代沖縄でもその事業や政策において模範とされる人物として、よく取り上げられる。つまり真境名はこれらの人物の琉歌を紹介することによって、琉歌に関する文学論考という体裁をとって、当時の沖縄の社会情勢を間接的に取り上げ、沖縄のあるべき姿を語っている。

これを鮮明に語っているのが、「雨夜の寝ざめ」の発表時とはほぼ同時期に発表された1899（明治32）年10～11月の「秋信録」という文学論考である。真境名はこのなかで、

県下各郡内を跋渉<sup>ぼっしょう</sup>して知見を広めなば、彼室内的遊楽に比して快樂と利益との両方面を有すること疑なかるべし。余輩の見る所に依れば、沖縄人ほど郷里に春恋する人種はあらじ。彼等は常住不変の尺土を守り、進で幸福なる境域<sup>もと</sup>を需むるの勇なきなり。彼文明国の遊牧人ともいはるゝ、欧米人士が、転々各地に住居して、幸福なる生活、楽しき家庭を作るに比すれば、その意気地なきこと<sup>ぼうぜん</sup>呆然たるの外なきなり<sup>18)</sup>。

と記している。これは真境名の直感的ともいえる感想であるが、沖縄人が沖縄に安住して進取の気性に欠けるとされていることに失望している。真境名は沖縄の現状を憂えるとともに、真境名自身のなかで、すでに「革新的なエネルギーといったものを多分に内蔵して」<sup>19)</sup> いたとみられる。

真境名は「秋信録」においてさらに続けて、沖縄の著述界について、

我が著述界は尚敬国司を中心とすれば、上代に於て羽地按司向象賢等一派の人士を除く外、敢て聞こゆるものなく、亦近代に於ても最も寂寞を極めたるものと謂ふ可きなり。今この寂寞たる著述界ありて稍考古の資と為り、其制度文物の一斑<sup>おぼ</sup>を靡ろげに認めらるゝものは、我が郷人及び漢土人の著作、並に近代に至りては内地史家の筆に上りしもの多少これあり<sup>20)</sup>。

と語る。潜在的な革新性という点からみれば、著述界は今やみるべきものない状態であると指摘する。しかし真境名によれば、歴史的には一部でみるべきものもあるという。それはまさに「雨夜の寝ざめ」と「続雨夜の寝ざめ」において真境名が取り上げた人物による著述であった。

真境名は「彼の本州人が世界の文明に目を閉ぢたりし時代に於て、我が沖縄の一角は夙に大陸より精神上の供給を受けたりき」<sup>21)</sup> として、近世日本の鎖国状態とは異なり、同時期に沖縄は中国大陸から絶えず精神的な影響を受け続けたという<sup>22)</sup>。しかしながら真境名はこれを肯定

的に受け止めていない。それは日本では漢文学が独自の発展を遂げたのに対して、沖縄では他動的姿勢に終始して、独自の発展を遂げることはできなかったからである。真境名はこのような歴史的背景があったために、沖縄は停滞的な状況に陥ってしまったとしている。

### 3 沖縄県政への批判

真境名による歴史に関する論考は数多くあるが、その主要なものは「蔡温時代の林政」（1913年）、「琉球藩庁の職制概観」（1913年）、「陳侃の観たる沖縄」（1915年）などである。また論考だけでなく、伊波との共著で『琉球の五偉人』（1916年）、『沖縄女性史』（1919年）などの著書を刊行している。さらに代表的な著書となる『沖縄一千年史』を1923（大正12）年に発表している。

真境名が本格的に歴史に取り組んだのは、前述のように1911（明治44）年に刊行された『沖縄教育』（第64号）の「偉人」特集の執筆にかかわったことである。それまで歴史に関心をもっていたものの、本格的に取り組んだのは、この時が最初であった。特集のなかで真境名は「蔡温の林政及農政上の施設」という論考を執筆している。真境名は林政史や農政史に関心をもったことから、本格的に歴史に取り組んでいる。

真境名は林政史に関する論考をまとめて『林政史稿』という著書にしたようである。伊波が「名著『林政史稿』が高橋（琢也）知事に認められて、一時重要視された」<sup>23)</sup>と記しているように、真境名の林政史に関する著書は知事も認める場所であったようである。ところがこの『林政史稿』は、「蔡温の林政及農政上の施設」などをまとめた著書であったものの、残存していない（少なくとも現時点では発見されていない）。しかし「蔡温の林政及農政上の施設」だけは、伊波との共著である『琉球の五偉人』のなかに収められている。

この「蔡温の林政及農政上の施設」のなかで、真境名は蔡温（1682-1762）の産業政策について考察し、蔡温の産業政策のなかでは、農業と林業に関する政策が優れていたと指摘する<sup>24)</sup>。当時の沖縄では、農業のほうは甘蔗作の改良が行なわれたものの、未だ農法の発達がなく、備荒貯蓄の観念も薄かったため、大飢饉のときにはかなりの被害が出た。これに対して蔡温は農業土木に力を入れて、灌漑排水を行ない、穀物の貯蔵を奨励したという<sup>25)</sup>。一方、林業のほうは、蔡温は樹木を育てるのは長年月を費やすことになるので、船舶建造や民家建築の需要にに応じていると、すぐに材木の欠乏をきたしてしまうという危惧を抱いて、林政に力を入れることになった。真境名によれば、蔡温が行なったことは、

自ら率先して国頭の山林地方を跋涉し造林法を教へ、尋いで林地の基礎を定むる為に実査をして柚山と田畑の境界を糾し、且つ山林法規を發布し営林機関を拡張したことである<sup>26)</sup>。



という。蔡温が着手した革新的なことは、林業の根本となる<sup>そまやま</sup> 杣山（王府監督の山林や入会地）の管轄区域を確定したことであった。それによって森林の濫伐を防止するだけでなく、植林の奨励も行なった。

このほかにも、蔡温は海岸一帯に潮垣という保安林を造成し、防潮や防風に役立てた。そして真境名によれば、造林は蔡温が着手した後も継続され、明治初期まで実行されていたという。琉球王国内では材木に関しては比較的需給のバランスがとれ、建築材、船材など用材の需要を満たすことができた。

琉球王国における造林はすべて地元の村に夫役として課され、事業として施行されていた。村の造林面積に比例して、一年間の夫役の何割かが造林費にまわされるために、この分の夫役の賦課が免ぜられた。真境名は、その金額を約700円、人数は4万人余であり、これによって杣山の造林費は不足しなかったと計算している。そしてこの制度は1879（明治12）年の琉球処分（廃藩置県）後に復活して、当時の政府から675円の助成を受けた。しかし約4万人の夫役数を無視したために、造林の成果がなかったと、真境名は琉球処分後の沖縄県政を批判する<sup>27)</sup>。

真境名が県政を批判した背景には、当時の沖縄における土地問題もあった。とくに杣山をめぐる問題であった。真境名は仲吉朝助（1867-1926、以下は仲吉）の『杣山制度論』（田中印刷、1904年）を引用して、その問題点を提示する<sup>28)</sup>。いささか長くなるが、杣山問題は当時の沖縄の中心的な問題であるので、振り返っておく。

沖縄では明治後半期に杣山の払い下げ、所有権の帰属などをめぐって問題が起こっている。明治期以前の沖縄の林野は三つに分類できる<sup>29)</sup>。一つは個人の私有という特徴をもつ仕明山野や請地山野などである。二つは間切（王府の行政区画）・島・村などが管理し共同で利用する間切保護山、村保護山、間切山野、村山野、唐竹山などである。三つは王府が監督し、間切・島・村が共同で管理し利用する杣山である。杣山は王府の山奉行所が監督機関として、その任にあっていたが、その一方で間切・島・村も総山当や山当などの役人を配置して、管理保護にあっていた<sup>30)</sup>。

杣山の造林に関する夫役は、間切・島・村が負担し、王府も一部を負担した。間切・島・村の農民は再生産に必要な林産物は、許可を得れば無償で伐採することができた。王府が木材などを必要とする場合は、上納させて、その代価を間切・島・村の負担する貢租から差し引くという方法がとられた。杣山をめぐる管理方法は、近代的な所有権にはなじまないものであり、沖縄県の方針は杣山を官有地に編入するというものであった。

しかし1885（明治18）年に宮古島役所への指令では、杣山は無禄士族の救済や産業開発の名目で、民間へ払い下げるといった計画が打ち出された。この払下げは従来までの地元農民の利用権を排除するものであったので、農民の反対運動が起こる。沖縄県はこの反対運動を押し切って、1893（明治26）年から1897（明治30）年までの5年間に、約8,265町歩の杣山の払下げを行なう。払下げの対象には、旧士族だけでなく、他府県の官吏なども含まれていた。

そして1899（明治32）年から土地整理事業が始まるが、この事業は杣山を官有地として法的に確定しようとするものであった。

土地整理事業が進行する過程で、臨時沖縄県土地整理事務局は、土地は官有に樹木は民有にという官地民木論に基づいて、杣山を官有地にしようとした。これに対して謝花昇（1865-1908、以下は謝花）らは、土地も樹木も民有という民地民木論で対抗したが、受け入れられなかった。土地整理事業は1903（明治36）年に完了し、この結果、沖縄県の山林原野の約73パーセント（山林の87パーセント、原野の32パーセント）は官有地となり、沖縄県における官民有地区分が確定した<sup>31)</sup>。

さらに1906（明治39）年に沖縄県杣山特別処分規則が公布され、土地整理事業の際に、官有地に編入された林野のうち存置を要しないものは有償で払い下げられることになる。この不要存置処分によって、1908（明治41）年には沖縄県の山林は、国有地約4,400町歩、民有地約7,700町歩となり、林野の所有権の帰属が確定した。

真境名の歴史に関する論考は、この間の状況を背景とするものであって、直接的に沖縄県の林政を批判するものではなかった。しかしながら蔡温の林政に関する叙述を通して、県庁内から鋭い批判を加えている。そしてこの論考は前述のように1913（大正2）年に第六代沖縄県知事（官選）として赴任した高橋琢也（1848-1935、以下は高橋）の認めるところとなった。高橋知事は約1年間の在任期間であったが、「農民の手によって県下の積弊をのぞき、ろう習をとりさり、その青年をして決然起って本県の向上発展の策を講ぜしめんとする」<sup>32)</sup>として、県民自身の手による発展を願った人物であった。高橋は県内各地を巡回し、県民の啓発につとめている。さらに沖縄県の振興策を政府に陳情するなど、機会あるごとに政府に向かって働きかけを行なっている<sup>33)</sup>。しかし高橋が1914（大正3）年7月に休職となると、真境名も「その後『沖縄現代史』編纂の美名の下に、図書館の郷土研究室の一隅に幽閉されて、間も無く失職し」<sup>34)</sup>た。真境名はこの時に沖縄県史編纂委員となっている。

伊波はこのような真境名を「世にも稀な硬骨漢でした。五斗米の為に膝を屈せざる底の人で、飽までも実力で押通した点は、その祖父に『似ち似まし』で、時流に阿らず、常に正義に味方した所は、遠祖大新城を偲ばせませす。林政について一意識を有しながら、林政課で敬遠されていたのも、専らそのため」であるとしている。真境名は伊波や末吉麦門冬（1886-1924）らと泡盛を飲む機会があったようであるが、そのたびに「閥族打破」をさげぶことが多かった<sup>35)</sup>。

## 4 歴史学の道

真境名の著書『沖縄一千年史』は島倉龍治（当時、那覇地方裁判所検事正であった、以下は島倉）との共著となっている。この間の経緯について、1952（昭和27）年に首里博物館の館長であった原田貞吉（以下は原田）が回想している<sup>36)</sup>。

大正十年遠州浜松より当地の検事正に任ぜられ島育ちの彼(島倉龍治)は大なる抱負と関心をもって赴任直ちに沖縄の歴史、文化民俗、産業等につき図書館通いをなし日夜勉強した。

彼は私に沖縄の歴史家の紹介を求めたので私は伊波普ゆう、真境名安興、末吉安恭の三氏を紹介した。

或日私は検事正と共に真境名先生を訪問した。談論数刻二人は全く百年の知己の如く会心共鳴死生を誓うのであつた。

先生はつと病床をはい出て戸棚の中から一からげの紙束を投げ出された。それが一千年史の原稿であつた<sup>37)</sup>。

と、真境名と島倉との出会いを回想している。島倉は着任後まもなく、原田の紹介で真境名と出会い、二人は意気投合した。そして、その時点ですでに『沖縄一千年史』の草稿にあたる原稿が、真境名によって執筆されていたようである。

この原稿について比嘉は、

大正八、九年の頃であつた。真境名さんは当時県庁脇にあつた図書館に毎日のように見えていた。そのころ一千年史はすでに脱稿し、やはり県からの依頼で沖縄現代史の筆を執っていたように覚えている<sup>38)</sup>。

と語り、すでに『沖縄一千年史』の原稿は1919(大正8)年ないし1920(大正9)年頃にできあがっていたとしている。そして『沖縄現代史』の執筆に取りかかっていたとされる。さらに東恩納は、

大正元年、小役人時代に、県史編さんの委嘱を受け、同十二年復命した。是の十二年間の職域で県当局が何様の礼を以て彼を待つたかは、知らないが結果から見れば、優れた人事であつたと云へる。その成果として一千年史が生まれたからである<sup>39)</sup>。

と語り、『沖縄一千年史』の原稿作成と1912(大正元)年の県史編纂事業との関連を指摘する。

真境名は1914(大正3)年7月に伊波らとともに沖縄県の企画した沖縄県史編纂委員に、県職員の身分で任命される。県史編纂事業は当時の大味久五郎(以下は大味)知事のもとで、真境名や伊波をはじめとする7名の委員・顧問・囑託を任命して着手される<sup>40)</sup>。各区や各郡に調査事項(伝説・名所旧跡・民謡・風俗習慣・古文書など)に関する指示を出して、報告を求めるといった方法がとられた。真境名は各地からの報告を受けて、その内容を整理する一方で、琉球処分後の県政史の調査を行なう。しかしこの編纂事業は政争などのために中断する。大味知事は『沖縄県産業十年計画』を策定するなど、意欲的に沖縄振興策に取り組んでいるが、『琉球新報』紙などによれば、かなり強引な姿勢があり、反感をもたれていた<sup>41)</sup>。真境名はこの編

纂事業の中断のために、翌1915（大正4）年12月に沖縄県を辞職する。

しかしながらその後も、真境名は「県事務嘱託」あるいは「県史編纂嘱託」という身分で、県立図書館で編纂業務に従事し続けた。前述の1921（大正10）年に原田がみた『沖縄一千年史』の原稿とは、この頃に執筆された草稿と考えられる。真境名は1915（大正4）年12月に県属を罷免されるものの、翌1916（大正5）年11月30日付の真境名による知事宛復命書の草稿では『沖縄現代史』を脱稿したとあり、復命書での真境名の肩書は「沖縄県事務嘱託」となっている<sup>42)</sup>。真境名が県史編纂にあたって、自ら責任をもって取り組んでいた部分は、現代史の調査と執筆であったということになる。

しかしこの現代史の原稿が、そのまま著書『沖縄現代史』となったわけではない。真境名は1922（大正11）年に『沖縄一千年史』の最終稿を書き終えて、『沖縄現代史』の原稿の改訂・増補に取りかかり、翌1923（大正12）年6月に「現代史要」と題する原稿として沖縄県地方課長宛に提出している。したがって『沖縄現代史』の骨格は、1916（大正5）年にはできあがっていたものの、その後、改訂や増補が行なわれて、1923（大正12）年に完成したことになる。しかも執筆は提出先から考えて、一貫して県委嘱によって行なわれたことになる。こうして沖縄県の県史編纂事業は、『沖縄現代史』として結実したということである。これは県史編纂事業として取り組まれたものなので、『沖縄県史』であったといえる。

もっともこの原稿は真境名の生前に刊行までに至らず、稿本のままであった。この稿本は、真境名逝去の4年後である1937（昭和12）年から『沖縄日報』紙が約2年間にわたって連載を組んで、多くの人の目に触れることになる。しかしその後、原稿は散逸し、掲載されていた『沖縄日報』紙も沖縄戦で失われたため、幻の著書となってしまった。しかし幸いにも戦後になって、八重山で『沖縄日報』紙の切り抜きが残されていることがわかり、1967（昭和42）年に琉球新報社から『沖縄現代史』の書名で単行本として刊行される。

この『沖縄現代史』は全四編からなり、琉球処分から大正期に及ぶ沖縄近代史を実証的に叙述した著書である。各編は実証的であると同時に、分野が多岐にわたり網羅的でもある。各編は時期によって区切られ、第一編の「置県前記」では琉球処分の経過や分島問題を整理した時期を扱い、第二編の「置県より日清戦役に至る」では琉球処分より日清戦争までの時期を扱っている。第三編の「日清戦役より県制施行に至る」では日清戦争後から1909（明治42）年4月の県制施行までの時期を扱い、第四編の「県制施行より大正十年に至る」では県制施行以降から1921（大正10）年頃までの時期を扱っている。

各編とも政治・行政、財政・税制、教育、兵事、産業、交通・運輸などの事項が取り上げられ叙述されている。沖縄県の設置から旧慣存続期を経て、土地整理以後の時期に及んでおり、本土とほぼ同様の制度が整備された時期を対象に、実証的に記述されている。前述のように著書としては戦後に刊行されているものの、原稿は大正期に完成しているので、この点で沖縄近代史を扱った著書として、最初のものであり、沖縄近代史研究の起点に位置付けられる<sup>43)</sup>。

とくに第二編以降の章立ては、諸制度と財政および税制の項目の後には、教育に関する詳しい説明があげられ、これは産業よりも前に位置付けられている。これが真境名の著書の特徴である。つまり真境名は「教育」に強い関心をもっていた。後に真境名は『沖縄教育史要』という著書を刊行していることから、その強さがわかる。この関心は、前述の沖縄県尋常中学校時代の事件における真境名の経験が大きく関わっている。

真境名によれば、明治期沖縄の「当時の為政者は、総て教育万能主義を執り、之に依りて、積年の陋習を打破し、以て新文明を鼓吹して、県民を誘導するに努めたりしなり。此時の教育費は、県下全体に於て五万八千八百六十二円余にして、之を就学生徒総数（学齢外も含む）に比較すれば、一人の為に費す所は実に八円三十六銭一厘に当れり」<sup>44)</sup> という状況であった。しかし1892（明治25）年前後の就学率は全国平均の45パーセントに対して、沖縄では男子が20パーセント、女子が6パーセントにすぎなかった<sup>45)</sup>。真境名は政府の教育方針が変更になっているものの、沖縄の就学率が依然として低いことを憂えていた。

当時の小学校に対する就学要求は、比嘉は自身の経験から、

首里人で地方に住む『居住人』にとって、最大の理想は『立身出世』して、また首里へもどることであった。われわれには、首里にも親戚があり、そこの子供たちにとって、われわれは、いくなればカントリー・カズンズ（田舎の従兄弟）であるから、やや見下げる風がほの見え、こちらもまたコンプレックスを持っていたのでなおいっそう首里風俗を見習うことを心がけた。逆にまた『なにをッ』といった反発の気分もあった。一方にはまたわれわれより一段低いとされている地元人がいる。私が長じて人間の平等、身分制への反感を感ずるようになった一因がこのへんにあったと思われる<sup>46)</sup>。

と回想している。沖縄のなかでの地域性ないし身分制が、就学率の障害となっていたことがわかる。

1893（明治26）年に首里の師範学校付属高等小学校へ入学した比嘉は、

まだまだ身分制度が生きている時だから、貴族階級に属する御殿や殿内など名家の子弟の鼻息の荒さは大変なものだった。大和人はともかく、訓導でも教生でも彼らには敬意を表し、言葉づかいからちがえて対した。一方、彼らは教師といえども山原や離島の出の教生には軽侮の情をもって接したものだ<sup>47)</sup>。

と記している。本土と沖縄、沖縄内での都市部と農村部における差別意識が根強く残っていた。真境名の教育に関する問題意識は、沖縄県尋常中学校時代の事件の根本的な要因が、依然として続いていることへの疑問から生まれたものであった。

しかしながら、1909（明治42）年には沖縄県の就学率は95パーセントとなり、全国平均とほぼ同じ数字に達している。これは明治政府および沖縄県庁による教育施策の積極的な展開の結果であった。沖縄県庁は1886（明治19）年の師範学校令・小学校令・中学校令の公布などに基づいて教育施策を進めた。その後、山県有朋（1838-1922）内務大臣、森有礼（1847-1889）文部大臣、伊藤博文（1841-1909）総理大臣、大山巖（1842-1916）陸軍大臣、西郷従道（1843-1902）海軍大臣らの沖縄視察が相次いで行なわれ、これら政府要人は軍事視察と同時に教育視察も行なっている。これらの視察は、もちろん沖縄の明治国家への帰属意識を高めることにねらいがあった。そして1892（明治25）年に薩摩藩出身の奈良原繁（1834-1918）が知事に就任すると、帰属意識を高めようとする教育施策の流れに、拍車がかかる<sup>48</sup>。この結果、明治国家による教育施策は、沖縄で様々な問題を引き起こすことになり、真境名の問題意識もさらに強くなる。それはやがて教育史の研究成果として結実する。

ちなみに『沖縄現代史』と同様、近代沖縄史に関する著書の太田朝敷『沖縄県政五十年』では、「教育進展の過程」として、ひとつの章が当てられている<sup>49</sup>。この章では沖縄統治について「置県後十数年の久しきに涉り、制度の上では何等目に立つほどの改革もせず、殆んど総て旧慣旧制を踏襲した県当局が、唯り教育に限り断然革新の方針を採り、十三年から着々敢行するに至つた」と指摘する。沖縄を代表する言論人であった太田朝敷（1865-1938、以下は太田）によれば、教育が推進されたのは「置県当初に於ける県の施政上、県民をして先づ時代に目醒めしむることに重点を置いた」<sup>50</sup>ためであるという。太田の見解は真境名とほぼ同じであり、学校の設立普及などが急速であったことが述べられている<sup>51</sup>。

『沖縄現代史』においては教育上の問題だけでなく、沖縄の自治制についても問題が投げかけられる。沖縄には旧慣制度が温存されていたが、真境名はそれを批判して、

沖縄の「エイ組」は、置県後に至りても亦、其旧慣を存し、農家の相互労力を交換して、援助することは、「エイマワリ」、「結交代」と称し、今に其旧慣を遺存するが如し。然れども、我邦明治の維新は、総ての旧習を破壊せしと同時に、此等の制度も亦一掃せられしが、（中略）。其後、社会の秩序整頓するに及び、官治行政は再び地方自治の必要を感じ、遂に現在の制度を創立せらるゝに至りしなり。（中略）

翻て沖縄の自治制を觀るに、置県後、旧制度は多少維持せられたりしも、当時は官権万能の時代たりしこと、本土に於ける維新の際の如く、徒らに其形骸を存せしに止まり、之が活用を見ることも少かりしなり<sup>52</sup>。

と語り、旧慣制度が実際には活用されていないと指摘する。真境名によれば、沖縄の旧慣制度は形骸化して、自治制の確立に寄与していないという。

## 5 歴史書の誕生

真境名の著書『沖縄一千年史』は、当時の沖縄史研究の水準を示しており、後世の研究者に大きな影響を与えている。この著書の初版は、前述のように『沖縄現代史』が成立したのと同年の1923（大正12）年に、島倉との共著で日本大学から出版される。それ以後、1974（昭和49）年までの約50年間にわたって、第七版まで版を重ねている。第七版まで内容的には変更がなく、再版（1934年3月）と三版（1934年4月）は目次の小見出しに頁数が入り、本文の引用文献などの活字が小さくなっている程度の変更があったにすぎない。四版以降は三版までの複製本であり、まったく同一である。真境名は1933（昭和8）年12月に逝去しているのに、版を重ねたといっても、内容は同一であった。つまりまったく同一の歴史書が、約50年間にわたって読み継がれてきたのであり、昭和期の沖縄史学に大きな影響を与えたことはいうまでもない。

『沖縄一千年史』の全体は五編からなり、

第一編 古代紀、                    第二編 四王統の興亡、          第三編 尚円王統前期、  
第四編 尚円王統中期、          第五編 尚円王統後期

となっている。基本的に王統によって時期区分がなされているが、王統紀以外の頁数が全体の半分以上を占めているので、単なる王統を中心とした通史ではないことがわかる。この著書の特徴は、主に日本本土と中国を中心とした諸外国との交渉史、神社・宗教、風俗、文化史および経済史に力点がおかれたことであった。とくに中国との交渉にまつわる進貢と冊封関係については詳細にわたっている。神社と宗教の章は、神社（琉球八社・固有信仰）・仏教・道教・基督（キリスト）教の四節から構成されている。

これら各節の説明は詳細にわたり、東恩納はこの著書を評して、「一千年史は、文字通り不朽の著述である。あえてこれを不朽と云うのは、その中に、何等朽腐すべき記述がないからである。一千年史は史実であつて史論ではない。著者の性格にも依る事であろうが、その史実の排列には何等の主観も入っていない。飽くまでも客観的に冷静に事実を網羅してある。（中略）史実としては、この本の外に逸脱する事は容されない。この意味において、一千年史は、沖縄の正史である。（中略）汗牛充棟も畜ならざる史書のすべてを失つても、一千年史だにあれば後考に備えるに足りよう」<sup>53)</sup>とまで述べている。

東恩納と同様に、当時の沖縄史研究者は押し並べて『沖縄一千年史』に対して高い評価を与えている。たとえば比嘉は、

『沖縄一千年史』は真境名さんのような人にして、はじめて成し得る著述であり、一種の百科事典だといわれるのももっともである。（中略）私は沖縄歴史研究の末班に加わって、絶えず『一千年史』を利用している。何か調べる時に一応は『一千年史』にあたって史料

検索の検討をつけることにしているの、大いにその恩恵を蒙っている一人である。『一千年史』の著述は、すでに三十年前のことである。歴史の学問はその後、大いなる進歩を遂げ、沖縄歴史の研究も今や旧套を脱して新気運を迎え入れ、さらに新しく深く研究を進めねばならない時期に達している。とはいえ、『一千年史』はこれからの研究者にとっても唯一の参考書であり、著者の功績とこの書の価値は永久に讃えられるべきであると信ずる<sup>54)</sup>。

と語る。この比嘉の回想は、『沖縄一千年史』の刊行からすでに30年が経過していた頃のことであり、この30年間で沖縄史の研究は進展していた。しかしながら、30年が経過してもなお、研究者にとって真境名の著書は見逃すことができないものであった。

真境名の後の第三代沖縄県立図書館の館長であった島袋全発（1888-1953、以下は全発）は、「常に座右に備えて参考資料を引き出さんとする者にとつてはこれ程貴重な郷土史書はなく、正に琉球学の百科辞典の役割をなすものと云うべき書物である。この事は柳田国男先生もその名著「海南小記」で紹介されて居たと記憶するが、故長友島袋源一郎氏は、この本は読む本ではなく引く本であると云つて同じ意味のことを云つて居た」<sup>55)</sup>と記している。沖縄史研究の仲原善忠（1890-1964）も同じ紙面において「極めて良い意味における沖縄史百科辞典である」と語っている。このように沖縄史研究者が語るように『沖縄一千年史』は、百科辞典のような意味をもち、沖縄史を語る場合の基礎的な資料となった。比嘉によれば、明治期以降に沖縄の歴史についてまとまった通史といえば、「真境名氏の『沖縄一千年史』、伊波先生の『孤島琉球史概説』、東恩納さんの『黎明期の海外交通史』、仲原さんの『琉球の歴史』など」<sup>56)</sup>であるとされる。

東恩納が語るように、『沖縄一千年史』は史実を記述したものであって、史論を展開したものではない。しかしそうであるからといって、この著書の歴史書としての価値が劣っているとはいえない。むしろ最初に理論ありきではなかったために、資料的価値が高くなり、沖縄史学の形成期にとって必要不可欠の著書となっているといえる。さらにこの著書に引用された史料の多くが、戦災などで散逸してしまった現在においては、より一層その価値を高めている<sup>57)</sup>。

真境名は著書にみられるように、沖縄史に関する百科辞典的な知識を誇っている。しかし博学という点だけが、真境名の学問を特徴付けているのではない。真境名の特徴については、『沖縄一千年史』よりも真境名の「備忘録」をみればわかる<sup>58)</sup>。この「備忘録」は、伊波が生前の真境名に対して「沢山の備忘録を随筆の形式で後生に残すようにすすめていた」ものであった。「備忘録」は随筆の形式で執筆された論考が集められて、『笑古漫筆』『歴史論考』『酒前茶後』などの題名でまとめられている（未刊行）。「備忘録」によれば、真境名の沖縄史学の特徴には主に五つの点がある。

第一に、真境名の方言（沖縄語）への関心の深さがみられる。『笑古漫筆』にはあまりみられないが、その他の「備忘録」には必ず方言の項目がある。沖縄方言と本土方言との比較という



視点が明瞭に出ている。たとえば、「方言調査」(第六・七巻)、「方言研究」(第七巻)、「沖縄方言の研究」「沖縄の方言の研究と大分のそれとの比較」(第八巻)、「方言研究の一端」(第九・十三巻)、「方言研究の断片」(第十巻)、「方言研究の一部」(第十一巻)、「沖縄の方言研究資料」「沖縄の方言研究資料の二」「沖縄の方言研究資料の三」(第十二巻)などである<sup>59)</sup>。これらの論考は、沖縄方言で特徴のある言語について、それらを辞書のように並べて、簡単な解説を加えたものである。伊波のように専門的に言語学を学んだ成果というわけではないので、体系立っているとはいえない。しかし関心の高さや視点の明瞭さにおいて、出色のものである<sup>60)</sup>。

方言への関心は、伊波の『おもろさうし』研究の恩師ともいべき田島利三郎(1870-1931、以下は田島)からの感化によるものであったとみられる<sup>61)</sup>。田島は沖縄県尋常中学校時代の真境名や伊波の恩師であり、中学校に赴任する以前から沖縄の言語に関する関心をもって、その情報を集めていた。田島はオモロ研究の先駆者であり、その史料を伊波に託した人物であった。真境名は中学校において、この田島から沖縄の言語に関する関心を駆り立てられた。

田島は1893(明治24)年4月に沖縄へ赴任した後に、旧家を訪問して史料を蒐集し、琉球語に関する研究を行なっている。伊波は教師としての田島について、「先生はその土地を研究するには、何よりも先きにその言語に精通しなければならないといふことに気がついて、到着早々から琉球語の研究に没頭されたが、一年も経たないうちに、沖縄人と同じ様にその方言をあやつることが出来た。それと同様に歌謡や組踊の研究にも腐心されたから、沖縄人以上にその古語に通じて居られた。のみならず、先生は、沖縄人と同じ様に話し、また感ずることが出来たから琉球研究者としては、十二分に成功すべき資格を備へてゐた。かうして先生は沖縄人の内部生活に触れることが出来たから、生徒には勿論民間の人々にも愛されてゐた。けれどもかういふ事は児玉校長の最も喜ばないところのものであった」<sup>62)</sup>と記している。田島の琉球語に対する関心は、沖縄文化への関心につながっていくが、その影響力は大きく、伊波や真境名へと受け継がれていった。

田島の琉球語を研究し、方言に精通しようとする行動は、当時の皇民化教育(日本への同化・教化教育)を推し進めていた沖縄県の方針と対立する。この結果、田島は前述の真境名らが処分を受けた中学校の事件と相前後して論旨免職となっている。田島は中学校を論旨免職となった後に、琉球新報社へ入社しているが、ここでも意見が合わず、退社して1897(明治30)年に東京へ戻っている。

真境名の沖縄史学の特徴における第二は、専門分野にこだわらず豊富な引用文献を利用して、沖縄史を多角的にとらえようとしている点である。これは引用文献の多様性に現れている。たとえば民俗学関係だけでも、『人類学雑誌』、『郷土研究』誌、『民俗』誌、『民族』誌、『民俗と歴史』誌、『紀州俗伝』、『南方随筆』、『続南方随筆』などにわたっている。多面性は一方では体系性に欠けるという面をもつものの、他方では総合性をもつという面がある。真境名が「多彩な資料を使いながら情報処理作業を続けていく根底には、沖縄の待つ文化要素の詳しい

具体的な情報蒐集と観察を継続していく姿勢を基本に置きながら、日本各地の民俗への視点を取り入れることで、空間的により広い枠組みの中で沖縄を捉えようとした思いが感じられ<sup>63)</sup>るのであり、その多角的な視点と総合性は沖縄史学の展開に大きな影響を与える。

民俗学以外にも、歴史分野において引用文献にあがっているのは、中山太郎『売笑三千年史』(春陽堂、1927年)、浜田青陵『東亜文明の黎明』(刀江書院、1930年)、羽田亨『西域文明史概論』(弘文堂書房、1931年)などである。真境名はほぼ独学で歴史を学んでいたために、かえって過去の歴史学の視点にとらわれることなく、沖縄史の史実や事象を広い視野からとらえることが可能であったといえる。しかしながら、その後の沖縄史学の展開において、真境名がめざした沖縄史学が形成されたかどうかは明らかではない。真境名の研究が独学であった故に、その手法の継承や検討がなされないままであったことが、その大きな原因である。この点で東恩納の沖縄史学と、その研究対象や関心対象が類似であったが、その後の展開では際立った違いをみせる<sup>64)</sup>。

第三に、現在では失われてしまった史料を利用している点である。その代表的なものは、「久米村例寄帳抜萃」や「例寄」などである。1929(昭和4)年に真境名が作成した「郷土志料目録」(法政大学沖縄文化研究所編『沖縄県立沖縄図書館所蔵郷土史料目録』、1982年)によれば、「久米村例寄帳抜萃」は1冊のみであり、「例寄集首」から「例寄九集」までの冊数は計129冊にのぼる。その他「例寄」関係文書を加えると、計142冊が存在していたことになる。これらは全て沖縄戦で失われたので、今や真境名による『笑古漫筆』から、その内容の一部をうかがうことができるにすぎない。この点で一部であるとはいえ、また真境名が意識的に保存したとはいえないものの、その史料の存続に大きな貢献をしたといえる。

第四に、家譜を広く引用している点である。真境名は家譜に関して古文書学的な分析は行っていないものの、家譜のもつ史料の価値を理解していた。たとえば「参照 家譜と史実五十一冊」(第七巻)、「大里城主の師・紅姓」(第十巻)、「名字をつけるときの心得」「更紗織と沖縄の型付」「江漢西游日記にある具志頭王子尚宏の墓」(第十一巻)、「久米島の家譜」(第十二巻)、「改姓のこと」(第十三巻)、「新参尤姓家譜」(『笑古漫筆』)などの論考で、家譜の史料価値を認め、大いに利用している<sup>65)</sup>。沖縄では家譜は単に家あるいは一族の系譜が描かれている冊子というだけではなく、琉球王国時代の身分制と深く関わっている<sup>66)</sup>。琉球王府は身分制を確立するために、1689年に系図座を設置して、士族に対して家譜の作成を義務付けていた。家譜は二冊作成され、一冊は系図座に、もう一冊は一族の本家に保管された。家譜をもつものは士族あるいは「系持ち」とよばれ、それ以外は百姓あるいは「無系」とよばれて区別され、これによって身分制が確立された。

家譜はその目録によると、約3,000冊あったとされる。一般的に明治期の廃藩置県(沖縄では琉球処分)によって身分制が廃止されたので、家譜の意味は失われた。しかしながらこの家譜は、沖縄史学にとって欠かせない史料である。系図座に保管されていた家譜は、明治期以降

に保管場所が変わったものの、残されていた。真境名はその史料的価値を重視して、沖縄史学に関する論考で活用した。しかし沖縄戦によって、系図座の史料はすべて焼失し、各一族で保管されていた家譜のほうは、一部戦火を免れたものがあったものの、現在では真境名によって引用された箇所が貴重な史料となっている<sup>67)</sup>。

第五に、古老からの聞き取り調査を行なっている点である。能書家の謝花雲石、郷土史家の比嘉重徳、絵師の長嶺宗恭らをはじめとして、旧家からも聞き取りを数多く行なっている。たとえば「長嶺華国翁の芸術談」(第八巻)、「金城弘氏の話」「具志川朝宣氏談」「中城村長談」「長嶺宗恭翁談」「富永氏(大中町)談」「喜瀬氏談」「奥野彦六郎氏談」「小那覇朝正氏談」「当銘清一氏談」「島袋林萃氏談」(『笑古漫筆』)などが、聞き取りに基づく論考である<sup>68)</sup>。真境名は聞き取りによって、家伝と史実を付き合わせ、それによって伝承の真偽を確かめようとしたようである。この聞き取り調査も、方言の研究と同様、田島の琉球語研究における調査方法を取り入れたものであった。

## 6 歴史観の有無

真境名による沖縄史学では、自己の歴史観や歴史意識を語っていないという特徴がある。これは徹底的に史実に基づいて語るという叙述スタイルがとられたからであった。この点では徹底的な実証主義を貫いた東恩納と類似である。しかしながら東恩納の場合には、その歴史観や歴史意識を語ることも多かった。これに対して真境名は歴史観を語ることがないので、その沖縄史学は理解しづらいものとなっている。あるいは歴史観や歴史意識のない歴史学が成り立つのかどうか疑わしいので、真境名には歴史観や歴史意識がないと断言してよいのかどうかかわからない。

『沖縄一千年史』は確かにその史料的な価値は大きなものであるが、百科辞典的とも評されているように、総花的であり、真境名の歴史に対する視点はわかりづらい。しかしながら、そこには真境名による歴史に関する叙述上の特徴が現れているので、歴史観がまったくなかったというわけではない。『沖縄一千年史』の特徴であった多角的なとらえ方は、言い換えれば、総合的なとらえ方もいえる。あえてこの総合性を真境名の歴史観であるとすれば、この歴史観がより鮮明となるのは、東恩納との首里古地図の作成年代をめぐる論争であった。

真境名は首里古地図の作成年代を、「首里町端の南市場の開設」と「首里城内の佐敷御殿の建設」という点から、尚敬王時代の1715年から1732年までの間に作成されたものであるという見解を発表していた。そしてこの間隔年数の前後17年間については、史実が発見されれば年数を縮めることができるとしていた<sup>69)</sup>。これに対して東恩納は、地図上の「首里町の創設について」「蔡温の邸宅」「同楽苑」「平敷屋の邸宅」「建善寺の再建」「用字に就いて」に関して、それぞれ疑義を投げかけ、古地図の作成は尚貞王末年(1700年頃～1709年)から尚益王(1710年～

1712年)にかけてのものであり、尚敬王までは下らないものとして、真境名の見解に異を唱えた<sup>70)</sup>。

これに対して真境名は「下町は市の南地に当らず」「佐敷御殿と蔡温の邸宅と孰れが信ずべき乎」「大宰相としての彼の第宅の図示されてないのは当然である」「同楽苑と中城御殿御菜園とは異名同義である」と反論する<sup>71)</sup>。これに対して東恩納は「首里市は、六衛の門口を有す」「蔡温邸は未だ建築に取りかからない」「同楽苑について」という点について再考を促している<sup>72)</sup>。この東恩納の疑問に対して、真境名は「尚敬王時代の蓮華院は地図に明記されて居る」「尚貞王―尚益王の時代ではない」、さらに「第一は首里市街の論で商店の意義」「蔡温即ち当時の神谷親雲上の邸宅のことに就いて」「同楽苑と中城御殿御菜園とは異名同義である」とこたえている<sup>73)</sup>。後に東恩納は自説を補強する史料が出てきたという理由で、「首里古図の作成年代につき追補」と題する論考を発表している<sup>74)</sup>。

結局、真境名と東恩納が問題とした作成年代の重複していない差は、わずかに2年である。このわずか2年をめぐる、真境名は計5回にわたって自説を展開し、東恩納は計3回にわたって自説を展開した。しかしながら両者は作成年代にこだわり、わずか2年の差を問題視していたわけではない。古地図という史料から何を読み取ることができるのかという点を問題としていた。

真境名は古地図に関して、市場、寺院、人名、職名、道筋、地形などを総合的に把握して解明していくという方法をとっている。これが前述のように、真境名の沖縄史学の特徴でもあった。東恩納も真境名と異なる方法をとって反論したわけではなく、ほぼ同様の方法をとっている。そして歴史を解明するにあたって、両者の共通点は総合性をもっていると同時に、厳密性や正確さを重視しているという点であった。たとえば、古地図上の蓮華院の存否をめぐる議論が、それを典型的に示している。東恩納はその記載が欠けていることを論拠にしていたが、真境名は詳細な検討を加えた結果、古色蒼然とした渋色の紙の裏に蓮華院と明記されていることを発見した。これによって東恩納は自らの見解を修正して、作成年代を尚貞34(1702)年から尚敬2(1714)年までの間として、真境名のいう作成年代に少し近づけている<sup>75)</sup>。これで即座に真境名説の妥当性が証明されたとはいえないものの、年代の特定化はその解釈や評論ではなく、徹底した厳密性のもとに築かれなければならないことを示している。

真境名の総合性は、厳密性や正確さに裏打ちされたものであった。この真境名の厳密性や正確さが、『沖縄一千年史』を単なる編年史にとどまらせていない。たとえば、慶長(の)役の原因を論じている箇所である。真境名は、

慶長役のことに就きては、沖縄の正史に伝ふること甚だ簡略に過ぎたり。(中略)其原因を以て専ら権臣謝名の聘問の礼を失するに帰す。然れども真相を穿てりとはいひ難し。当時薩州の内訌既に息み、三州は平定せられて、内顧の患なく、天下は徳川幕府の樹立と共に、雍熙の氣運に向ひて大なる後援者を得たれば、之れより多年の宿望たる凶南の鵬翼を

伸すことは、之れ予定の行動を取れるものにあらずや。譬へ謝名の排薩親明の政策なしとするも、明貿易の巨利を獲んが為めに、琉球の内治に干渉せんことは、彼等に取りては最も必要なる処置にてありしなり。(中略) 戦前よりして既に大島群島分割の交渉を開始せし程なれば、平和の解決は到底望まれざりしならん。謝名親方の行動も之に激せられて、多少常軌を逸せしならんも、一謝名の為めに慶長役を起せりとは到底信ずべからざるなり。謝名の行動は、慶長役の口実を彼に設けしめ、慶長役を早め、慶長役に点火せる者と云ひ得べけんも、慶長役を起し、唯一の真原因が之に在りといふは、皮相の観察に過ぎざるなり<sup>76)</sup>。

と記している。真境名がいう慶長役は、日本の国内事情に大に関わるものである。したがって交渉にあたった謝名親方(政治上の最高責任者の三人のうちのひとり)の態度に問題があったからであるというのは、皮相な見方であるにすぎないと批判する。厳密性を求める真境名の沖縄史学という学問は、ここに出発点があった。

ちなみに真境名がいう慶長役は、現在では薩摩の侵攻あるいは侵略と表記される場合が多い。東恩納も『琉球の歴史』では真境名と同様に、「慶長の役」を使用している。比嘉は『沖縄の歴史』において「島津の琉球入り」と表現している<sup>77)</sup>。真境名も東恩納も、さらに比嘉も、侵攻や侵略という用語は使用していない。それはもちろん従属を強いられた状況の記述を避けようとするものではなく、日本と琉球は対等の関係であったことを強調しようとする意思の表れであった。

この対等関係を強調する点に、真境名の歴史観のもうひとつの特徴がある。それは歴史の主体をどこにおくのかを問題視することと共通している。これは真境名が幣原坦(1870～1953、以下は幣原)による『南島沿革史論』(1906年)を批判していることに現れている。幣原によれば、島津による琉球への侵攻の原因は「室町幕府の末より徳川幕府の初にかけて、彼が礼を我本土に失せしこと」にある(彼とは沖縄のこと)という。これに対して、真境名は『沖縄一千年史』において、

幣原坦氏の南島沿革史論には、慶長役の原因を以て、専ら来聘の礼を失せしにありとし、十余項を数へたれども、慶長前は未だ主従の関係明かならず、且つ島津氏の来簡にも、吾れ貴国と兄弟の約ありとあるが如く、全く対等に隣交を修めしことは、当時の往復文書に依りて明なれば、単に隣交の礼を失するを以て此戦役を起せりとは早断すべからざるなり<sup>78)</sup>。

と反論する。真境名の反論は、琉球と日本とは対等の関係であったという、沖縄史を語る場合の基本的な視点を指摘する。

そして真境名は明らかに意識していたようであるが、「薩琉関係」という用語は一切用いて

いない。真境名は「琉薩の関係」「琉薩交戦」などのように、琉球を先に記述する。たとえば、『沖繩一千年史』には「琉薩間の公務を処理せしむ」という文言があり、『沖繩現代史』には「琉薩間最初の附庸関係」という項目があり、さらに「琉薩交戦の始末」という題名の論考を発表している<sup>79)</sup>。真境名の歴史研究は、当然のことであるが、琉球や沖繩を軸に置いている。同じ琉球や沖繩の歴史を取り上げる研究者が、「薩琉関係」という用語を慣例的に使用しているのとは、著しく異なる点である<sup>80)</sup>。

真境名は自らの歴史観を語ることがほぼなかったとはいえ、わずかに1927(昭和2)年9月17日に沖繩県農会主催の農事講習会における「沖繩農政史一斑」と題された講演において、歴史観を語っている<sup>81)</sup>。この講演で真境名は上代から置県までの農事の沿革を語ることから始めている。そして農政の必要はなぜ起こったのかと問いかける。真境名によれば、「永い間の経験は現代の学説とは相容れぬ所があるかも知れぬが色々の改良をなし土台を築くに方っては故人のやうな事を振返って見て所謂過去を知って将来を慮るのである」<sup>82)</sup>という。つまり現在の問題から歴史を振り返り、新たな政策を実施していくことになるという。真境名は前述のように沖繩県政の批判から歴史学への道をたどったように、農業政策の必要性も同じように起こるといふ<sup>83)</sup>。

その際、真境名は沖繩を理解するには「郷土」に立脚しなければならないという。

現代の傾向は郷土に立脚すると云ふ事が世界的に真理とされて居る。郷土に立脚し、郷土から出発せぬのは間違である。歴史の方面ばかりでなく文学でもそうである。今日では郷土文学が盛んで他府県でも此種の刊行物が沢山あって却て中央の方に逆輸入をして居るといふ珍らしい現象になって居ります。

日本の歴史的事実も中央ばかりで郷土を離れての研究発表だから誤謬が多い。これらは宜しく土着の人から教を受くべきものである。郷土を閉却して中央を重んじて居たが今日はそうではない<sup>84)</sup>。

として、郷土、つまり地元である地域の知ともいうべきものから出発すべきことを強調する。真境名は吉田東伍『大日本地名辞書』(富山房、1900～1911年)を例にあげて、この著書は郷土から出発していないために大きな誤りを犯しているという。真境名は「あれ程間違の多いものはないと思はれた。之れは郷土に立脚せぬからである。中央の人は土着の人のやうに知らぬ」<sup>85)</sup>と批判する。

さらに真境名は、歴史学の文書偏重主義ともいうべき方法に対して批判的である。

従来の歴史は余りに文書に重き(をおき)過ぎたのである。それよりは其の土地の、風俗、習慣に依って調査するのが、寧ろ真理に近いものがある<sup>86)</sup>。

と述べる。この主張は真境名の理想像を語っているわけではない。真境名の研究姿勢そのものを語っているのであり、歴史観は文書をたどることによって形成されるものではないことを強調している。前述のように真境名が聞き取り調査を行ない、方言、民俗、慣習などに強い関心を示したのは、このような歴史に対する姿勢に裏付けられたものであった。

## 7 郷土文化史の展開

真境名は晩年の1927（昭和2）年に「沖縄郷土協会」の初代会長となり、研究者の糾合をはかる一方で、文化運動にも尽力している。沖縄郷土協会の設立は、前述の真境名による郷土に立脚した研究が必要であるという主張に応えたものであった。郷土に関する類似の団体としては、すでに1922（大正11）年に真境名らによって沖縄史蹟保存会が組織されていた。この保存会によって羽地朝秀之墓碑や尚巴志王遺蹟碑などが建立されている。1925（大正14）年頃に「沖縄郷土研究会」が結成され、真境名が会長となり、島袋源一郎（1885-1942、沖縄県立博物館の初代館長、以下は島袋）、奥野彦六郎（1895-1955、裁判官で沖縄法制史研究者）、宮城真治（1883-1956、民俗学研究者、以下は宮城）らが参加している。

1927（昭和2）年頃には「南島研究会」が、真境名をはじめ島袋、宮城、そして全発らの沖縄在住者によって組織され、機関誌『南島研究』第一輯が翌28（昭和3）年に刊行される。それまで沖縄には、地元の研究者が相互に協力して、南島（奄美大島も含む）という包括性をもって、史料や研究実績を発表し、情報交換をする場がなかった。この意味で研究会は、真境名を中心として取り組まれた初めての試みであった。これが地元沖縄において独自の郷土研究を意図して初めて行なわれた組織的な動きとなる。

南島研究については、すでに東京において1922（大正11）年に柳田国男（1875-1962、以下は柳田）を主宰者にして「南島談話会」が設立されていた<sup>87)</sup>。この南島談話会はそれ以前の1910（明治43）年に設立されていた「郷土会」の構成員に、在京の沖縄県人を加えて開催されたものである。第一回の南島談話会は1927（昭和2）年6月29日に開催され、出席者は柳田・金田一京助（1882-1971）・岡村千秋（1884-1941）・魚住惇吉・伊波・金城朝永（1902-1955）・富名越義珍（1872-1957）・比嘉・金城保・南風原鏡・島袋源七（1897-1953）・仲宗根源和（1895-1978）の12名であった。しかし談話会の開催は不定期であり、1925（大正14）年にはまったく開催されず、1928（昭和3）年2月から1931（昭和6）年6月までは中断し、同年7月に復活している。復活後に隔月に機関誌『南島談話』が発行されている。したがって、南島研究会の発会は南島談話会よりも遅かったとはいえ、機関誌の発行については先行していた。

『南島研究』第一輯において真境名は、南島研究に至った沖縄研究の展開を概略している。いささか長いが、沖縄研究の展開が概観されているので引用する。真境名によれば、沖縄のような

神秘的な島国も、廃藩置県後の文明の風潮には、抵抗することが出来なかつたやうで、所謂文明の醗酵すると共に、古琉球の文化は危期に瀕した時代もあつたのである。即ち一知半解の徒輩が琉球研究を以て復古思想の再燃と誤解し、古文書の棄却や、名所旧跡の破壊が到る所で企てられ、將に薩州治下に於ける、奄美大島の覆轍を踏まふとしたのであつた。此時に當つて一即ち明治二十五六年頃一県の中高等学校に教鞭を執られて居つて田島利三郎氏や新田義尊氏や黒岩恒氏などが、琉球の過去現在に興味を持たれて、その歴史や、歌謡言語及び自然科学などの研究をはじめ出して、漸くこれが価値づけられて、彼等の自覚を促がしこれと前後してわが文科大学講師のチェンバレン氏等も亦渡琉せられて研究をされたのである。是から引つゞいて幣原坦博士や、鳥居龍蔵博士・金沢庄三郎博士なども来県されて、各専門の研究を発表され、暗黒なる琉球が漸く光明へ出されるやうになつたのである。而してこれより先土着の沖繩人にも、亦故喜舎場朝賢翁や山内盛憲翁などのやうな郷土研究家もあつたけれども、之れが最も高潮されたのは明治の末期からで、即ち畏友伊波普猷氏や、東恩納寛惇氏や、故末吉安恭氏等の研究であつたやうに思はれる。これから、古琉球の文化が漸く識者の間に認めらるゝやうになつたが、未だ一般には徹底しないで疑心を以て迎へられたやうであつた。然るに最近に至り、柳田国男氏や、伊東忠太博士、黒板勝美博士等の来県があり、これら巨擘を中心として在京諸友は勿論県外の人では、畏友鎌倉芳太郎氏などが、その専門の立場からして、熾に中央で琉球の文化を紹介せられ、又南島談話会なども生れて東都に於ける琉球研究者の機関も出来るやうになり、殊に啓明会などの財団法人もその研究に同情されて資金を投ぜられ、これで一層鼓吹されたやうに思はれる。而して琉球研究は、その本場を離れて、中央に持出された喜ばしい現象であるが一方郷土に於ても亦之れが閑却せられてゐるといふ訳ではない<sup>88)</sup>。

真境名は琉球研究が郷土においてもさかんになりつつあるので、『南島研究』誌を發刊すると語る。沖繩以外の研究者が沖繩に注目するのは、知的刺激となり、東京で沖繩研究がさかんになることは喜ばしいことである。しかしながら真境名は前述のように、研究は郷土から出發すべきものと考えていたので、地元沖繩において研究がさかんになることを最も望んでいた。

沖繩郷土協会では1931(昭和6)年に第一回郷土研究座談会が開催され、それが七回まで続いている。1933(昭和8)年に真境名会長は逝去するので、太田が二代目の会長となる。もっとも同年に太田は「沖繩県文化協会」の会長になっており、沖繩郷土協会は沖繩県文化協会と合同することになり、太田が会長になつたということである。その後、1936(昭和11)年に沖繩郷土協会の協力によって沖繩郷土博物館が設立されている。

沖繩郷土協会をめぐつては、以上のような動きがある一方で、真境名には新たな依頼がもたらされる。1929(昭和4)年11月に、沖繩県師範学校の3名の教諭が、当時、沖繩県立図書館長であつた真境名を訪れ、同校校長の依頼を伝える。その依頼とは、沖繩県師範学校が



1930（昭和5）年6月で創立五十周年を迎えるので、沖縄教育史をまとめてほしいというものであった。この委嘱を受けた真境名は約1年間をかけて原稿を書き、それは師範学校の校友会誌『龍潭』の特別号として刊行された『沖縄県師範学校創立五十周年記念誌』（1931年6月）に掲載される。この沖縄教育史に関する論考が、戦後の1965（昭和40）年9月に沖縄書籍販売社から『沖縄教育史要』として復刊される<sup>89）</sup>。

『沖縄教育史要』は、「本土に於ける各藩に較べて、その沿革と環境を異にして居る沖縄の教育を、歴史の上から考察する」<sup>90）</sup>という目的で書かれたものであった。全体は四編に分けられ、真境名のそれまでの著書と同様、通史的に記述されている。その内容は単に教育機関の展開を追うというのではなく、琉球文化の発展に寄与した文化的な行為を広義の教育と位置付けて執筆されている。つまり真境名による教育史は、文化史的な意味合いを強くもった<sup>91）</sup>。

第一編「上古期」は舜天王統から察度王統まで、第二編「中古期」は第一尚氏王統から第二尚氏王統尚永まで、第三編「近世期」は尚寧から尚泰まで、第四編「現代」は琉球処分から昭和初期まで、と区分されている。なかでも第三編に大半の紙幅が割かれて、それが琉球の教育史の中心的な部分とする構成になっている。もっとも第四編の現代の部分については、真境名はすでに『沖縄現代史』において記述したという意識があり、この部分はそれほど紙幅が割かれていない。また真境名は『沖縄一千年史』においても琉球教育史について、すでに概括していたので、『沖縄教育史要』では教育史の骨格を体系的に叙述するという意図をもっていたようである<sup>92）</sup>。

『沖縄教育史要』のなかで中心的な位置付けである第三編では、冒頭で「羽地仕置」（仕置は必要に応じて廻文の形式で出され、場合によっては條書にして各役所に提示された）において、しょうじょうけん向象賢（羽地朝秀，1617-1676）が述べた士族子弟の必須修養科目を引用し、それを敷衍する形がとられている<sup>93）</sup>。向象賢は慶長の役の後に、琉球復興を行ない、人心の刷新を図るために、人材育成に力を入れた人物である。向象賢が示した必須修養科目とは、

- |         |         |
|---------|---------|
| 一、学文之事  | 一、算勘之事  |
| 一、筆法之事  | 一、謡之事   |
| 一、医道之事  | 一、庖丁之事  |
| 一、容職方之事 | 一、馬乗方之事 |
| 一、唐楽之事  | 一、筆道之事  |
| 一、茶道之事  | 一、立花之事  |

であった<sup>94）</sup>。真境名によれば、向象賢はこれらの科目を示して、謡曲・茶道・立花などの日本的な趣味よりも学問・医術・算法・唐楽・乗馬などを重視した。そしてこれらを奨励して、一芸一能のないものは、たとえ名門の子弟といえども仕途に就くことを許さないと厳達したという。つまり血縁よりも能力を重視する姿勢がみられるという。

真境名は「羽地仕置」<sup>95）</sup>の規程を跡付けて、それによって学問や諸芸を担う人材育成の状況、

中国と日本との交流状況などを解説する。東恩納は、この真境名の記述に関して、「向象賢の大和芸能に挙げられた各種の項目を採上げて、その沿革を丹念にまとめた手際は鮮やかなもの」<sup>96)</sup>と評価している。真境名は郷土沖縄の教育ないし文化における問題点の解決を人材育成に求め、その方法に向象賢まで振り返って見出していくべきであると考えている。

第三編の第二章と第三章では、18世紀末から19世紀の状況について、とくに学校制度を取り上げ、国学、平等学校、村学校の創設から各学校の教授陣、教授内容、管理規則に至るまで、具体像が詳細に記されている。『沖縄教育史要』においても、真境名が引用した史料の多くは沖縄戦ですでに失われているので、現在では真境名の記述は沖縄教育史の研究にとって貴重な資料となっている。

## 8 結 語

真境名は同世代の学友である伊波や東恩納とは異なり、高等教育を受ける機会に恵まれなかった。さらに伊波や東恩納のように、郷土を離れて東京に拠点を移して学問を深める機会にも恵まれなかった。真境名は独学によって博覧強記の域に達したといえるが、このような境遇がむしろ真境名の学問的性格を規定し、著書にみられるような知性を形象したといえる。真境名の著書や数多くの論考は、学問的な基礎がないという理由で、網羅的にみられる向きもある。しかしながら、学問的な基礎がないからこそ、著書や論考のなかに込められた真境名の認識や批判のあり方を読み解く必要がある。それによって真境名による沖縄史学の特徴を浮き彫りにできる。

伊波は「真境名君は、実に死に至るまで何物よりも書物を愛して、一生を送った学徒」であると評している。真境名は伊波から多くを学んだことは確かであるが、それと同時に伊波に対して多くの影響を与えている。伊波は真境名に対して、「私はまず自分の研究に直接必要なものをよりよく繙き、間接に関係のある部分は、同君に読んで貰うことにしていました。同君は私が要求するのを能く心得ていましたから、見出す都度、附箋をつけて、廻してくれたので、私は座ながらにして、資料を得ることが出来た」と語る。さらに続けて「同君の漢学の力を十分認めていた私は、難語難句にぶつかる都度同君に解釈して貰」って、「安心して信用できる生き字引なる同君にきくのが、早道だ」と語っている。伊波は上京してからも、「大いに同君を利用しました。自分に必要な資料について手紙で質問しますと、同君は早速返事をくれ」と語っている。伊波にとって学問上、真境名は必要欠くべからざる存在であった<sup>97)</sup>。

さらに伊波が沖縄県立図書館の館長時代に発刊した『琉球史料目録』(大正13年2月)では、真境名が「序」を書いている。この目録作成は、県庁にあった「琉球史料」を沖縄県立図書館に移したことにともなうものであった。伊波はその「凡例」で「琉球史料の永久的保存方法を講ずるのは、首里城の永久的保管方法を講ずるのと同じく、一大事業でなければならぬ」とし

た上で、史料の蒐集に関して「真境名安興氏は、開館当時から今日に至るまで、多大な貢献をされた。(中略) 氏の名は恐らく郷土研究の続く限り記憶されるであろう」としている。このように真境名は伊波の学問にとって、さらに琉球史料の整理という意味で、多大な貢献をしている。しかしながら、真境名は単に史料の蒐集や提供を行っていたわけではない。真境名は当時の社会に対する問題意識をもち、それを解明するために歴史に関心を寄せ、独自の歴史観を形成した。これによって真境名は沖縄史学への道を開いた。

比嘉は「博覧強記の真境名君があらゆる文献を渉猟し読破して、一千年にわたる資料を胸中に収め、これに序列を与え達意な筆に載せたのがあの『一千年史』であろう。研究者はこれを一種の歴史辞典として利用することができる」<sup>98)</sup>と語っている。『沖縄一千年史』は「沖縄歴史辞典」として活用できるという。しかしながら、これは単に多くの知識が整理された冊子として役立つという意味ではなく、琉球王家中心の叙述ではなく、広く琉球の庶民の政治や文化に触れているという意味である。『沖縄一千年史』には広範な琉球文化に触れることによって、沖縄の歴史を再構成しようとする意図が現れている。真境名の沖縄史学の形成を支えたのは、地元沖縄への問題意識であり、沖縄県政に対する批判であった。

琉球史研究の高良倉吉によれば、「歴史家の生命は、分析され蓄積された歴史的事実を、どう歴史像として正確に構成するかという点にかかっている。この意味で、真境名は彼みずから書き並べた多くの小論に、通史的秩序を与え、そのことによって自己の研究成果を総括する課題をかかえこんだといえよう。この課題は、基本的に文献実証主義歴史学の立場に立つ彼にとって、編年体的スタイルで歴史的事実を整理することによってはじめて実現されることになる」<sup>99)</sup>と記している。この立場での歴史学の展開という点では、真境名と東恩納とは類似であった。

東恩納は1909(明治42)年に発表された小論において「諸君吾々は上下幾千年に亘る郷土の歴史を調べて吾々が誠に優秀な国民であると曰ふ自覚の上に立って自ら琉球人たる事を天下に名乗るを矜りとする者である」<sup>100)</sup>と語る。沖縄は沖縄自身の歴史に学び、かつその歴史的伝統に「矜り」をもち、先人の歴史的遺産を継承することによってはじめて自己を自覚し将来を構想できるという<sup>101)</sup>。しかし史料に基づく歴史学を展開する実証主義歴史学を貫く東恩納にとって、この構想には歴史理論が前提になるという「自己規制」がかかっている。

さらに史料によって歴史を語らせるという姿勢は、真境名と東恩納とではほぼ同じであったといえてよい。しかし、その史料を取り上げる脈絡については、両者はかなり異なっていた。東恩納は東京帝国大学で歴史理論を学び、実証主義的な方法を身に付けて、沖縄史に取り組んだ。その取り組みは在京でありながら、強い郷土意識に支えられたものであった。この一方で真境名は、歴史理論を学ぶ機会をほぼもたなかったために、史料に関して厳密性を追求し、その総合性を考慮に入れた沖縄史学を展開した。この点が真境名の沖縄史学を支えたのであって、歴史理論が支えたわけではなかった。

両者には、このような違いがあったとはいえ、沖縄の歴史を構築して、それを将来に向かって、どのように反映させていくのかという共通の課題をもっている。もっともこの課題は両者だけが負っていたというわけではない。沖縄あるいは日本全体に投げかけられた問題でもあった。東恩納は真境名の臨終にあたり、「私は常にかう考へてゐる。郷土史の研究は単なる科学ではない。郷土に共鳴なくして郷土史を取扱ふ事は出来ない、と。郷土の言語歌謡を調査するにさへ、その語感や背景を感得する事なしには、十分にその意味を闡明する事は出来ない。笑古君を失つて、吾々は郷土史に対する共鳴を今後誰に求めよう。名状しがたい淋しさがひしひしと胸に迫つて来る」<sup>102)</sup>と記している。東恩納は真境名の業績を評価し、真境名が問ひかける課題を、後世に向かって投げかけている。

真境名は沖縄の歴史に何を求めたのであろうか。沖縄史研究の新里恵二によれば、

伊波（普猷）、真境名（安興）、比嘉（春潮）先生など諸先学の書かれたのをずっと読んでみると、諸先生の沖縄研究の根本の動機になっているのは沖縄人が日本民族の一分枝だということをいろんな点から立証づけようとした点にあるのではないかと思います。その点で一度比嘉先生に、そう理解してよろしいでしょうかとおききしたことがあります。その通りというお答えでした<sup>103)</sup>。

ということである。ここで指摘しているのは、比嘉の答えを通してではあるものの、真境名の中心的な課題は「沖縄人は日本民族の一分枝」であることを学問的に立証しようとするのであった。比嘉の評価がなされた戦後の当時までは、真境名はこの課題にこたえるために、歴史学を形成していったという評価がなされていた。

もしそうであるとすれば、真境名以降の沖縄史学は、戦前期には「沖縄人は日本民族の一分枝」であることの証明に向けられていたことになる<sup>104)</sup>。そしておそらく戦後には、それが自明の真理として定着したものとされてきたようである。しかし現在、改めて日本歴史のなかに沖縄をどのように位置付けるのかということが、大きな課題として提起されている。この課題にこたえるために、私たちは今一度、真境名が構築した沖縄史学に立ち戻って考察することが必要とされているのではないだろうか。

#### 付 記（年譜と主要な著作）<sup>105)</sup>

- |                |                               |
|----------------|-------------------------------|
| 1875（明治8）年5月   | 首里に生まれる。                      |
| 1894（明治27）年5月  | 京阪地方へ修学旅行。                    |
| 1895（明治28）年11月 | 尋常中学校ストライキ事件の首謀者として退学処分。後に復学。 |
| 1897（明治30）年    | 中学校卒業後に琉球新報記者。                |
| 1898（明治31）年5月  | 沖縄県首里区書記を拝命。                  |

- 1899 (明治32)年1月～2月 『琉球新報』紙に「雨夜の寝ざめ」を発表。
- 1900 (明治33)年7月～8月 『琉球新報』紙に「続雨夜の寝ざめ」を発表。
- 1901 (明治34)年10月 那覇税務管理局関税課(大蔵省属)勤務を拝命。
- 1907 (明治40)年7月 『琉球新報』紙に真境名笑古の雅号で漢詩を発表。以後、大正期にかけて多数の漢詩を発表。
- 1913 (大正2)年1月 『沖縄毎日新聞』紙と『琉球新報』紙に「蔡温時代の林政」を発表。
- 1914 (大正3)年7月 沖縄県史編纂委員を拝命。
- 1915 (大正4)年12月 沖縄県属依頼免本官。
- 1916 (大正5)年7月 『琉球の五偉人』(伊波普猷との共著)を小沢書店より発行。
- 同年11月 『沖縄現代史』を脱稿(県知事より委嘱)。
- 1917 (大正6)年 沖縄毎日新報記者。
- 同年 『沖縄毎日新報』紙に「古地図より見たる首里」,「再び古地図より見たる首里」,「三たび首里の古地図に就て」,「四たび首里の古地図に就て」,「五たび首里の古地図に就て」を発表。
- 1919 (大正8)年10月 『沖縄女性史』(伊波普猷との共著)を小沢書店より発行。
- 1922 (大正11)年9月 沖縄内務部長より学制五十年記念事業として県教育史の編纂を依頼。
- 1923 (大正12)年6月 『沖縄一千年史』(島倉龍治との共著)を日本大学より発行。
- 1924 (大正13)年9月 県立農林学校教諭心得を拝命。
- 1925 (大正14)年11月 県立農林学校を辞し、沖縄県立図書館館長に就任。
- 1927 (昭和2)年 沖縄郷土研究会を設立し、会長に就任。
- 同年 島袋源一郎や島袋全発らと共に南島研究会を設立。
- 同年9月 県農会主催農事講習会において講演し、後に「沖縄県農政史一斑」として『沖縄県農会報』に掲載。
- 1928 (昭和3)年3月 南島研究会の機関誌『南島研究』を創刊。
- 1931 (昭和6)年6月 『沖縄県師範学校創立五十周年記念誌』に「沖縄教育史要」を発表。
- 1933 (昭和8)年12月 那覇市において永眠。
- 1935 (昭和10)年3月～8月 『琉球新報』紙に「笑古漫筆」の掲載。
- 1937 (昭和12)年4月 『沖縄日報』紙で「沖縄現代史」の連載開始。
- 同年8月 『沖縄統計』創刊号に「蔡温の産業政策」の掲載。
- 1938 (昭和13)年1月 『月刊琉球』誌に「笑古漫筆」の掲載。
- 1967 (昭和42)年8月 『沖縄現代史』(初版)が琉球新報社より刊行。

## 注

- 1) 名嘉正八郎「真境名安興小論」(『新沖繩文学』, 第33号, 1976年, 35ページ)。
- 2) 東恩納寛惇「真境名笑古を憶ふ」(東恩納寛惇『東恩納寛惇全集』第5巻, 琉球新報社, 1978年, 287～8ページ)。
- 3) 拙稿「東恩納寛惇と沖繩史学の展開」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第43号, 2011年, 14～46ページ)。
- 4) 比嘉春潮「庶民中心の歴史——通史を書き終えての感想」(比嘉春潮『比嘉春潮全集』第2巻, 沖繩タイムス社, 1971年, 232～5ページ)。
- 5) 真境名が『学友会雑誌』に投稿した「毛氏由来伝」は現存していない。
- 6) 名嘉正八郎, 前掲論文, 1976年, 37～8ページ。
- 7) 伊波普猷「中学時代の思出——この一篇を恩師下国先生に捧ぐ」(伊波普猷『伊波普猷全集』第7巻, 平凡社, 1975年, 357～77ページ)。
- 8) 伊波普猷「真境名君の思出」(伊波普猷『伊波普猷全集』第10巻, 平凡社, 1976年, 169ページ)。
- 9) 東恩納寛惇「真境名笑古を憶う——沖繩一千年史の著者」(『琉球新報』, 1952年11月13～15日付)。
- 10) 仲程昌徳「解題 柳月・新しい歌のふくろ」(真境名安興『真境名安興全集』第4巻, 琉球新報社, 1993年, 393～405ページ)によれば, 真境名は沖繩における最初の新派歌人であった。以下では, 『真境名安興全集』は『全集』と略し, 出版社(琉球新報社)と刊行年(1993年)も略す。
- 11) 伊波普猷「真境名君の思出」(伊波普猷, 前掲書, 1976年, 169ページ)。
- 12) 東恩納寛惇, 前掲論文, 『琉球新報』, 1952年11月13～15日付。
- 13) 伊波普猷「真境名君の思出」(伊波普猷, 前掲書, 1976年, 168ページ)。
- 14) 新城安毅「『一千年史』の父, 笑古を語る」(『沖繩タイムス』, 1952年11月23日付)。
- 15) 真境名安興「雨夜の寝ざめ」(『琉球新報』, 明治32年1月5日～2月20日付; 『全集』第4巻, 97～102ページ); 真境名安興「統雨夜の寝ざめ」(『琉球新報』, 明治33年7月25日～8月5日付; 『全集』第4巻, 103～7ページ)。琉歌については, 池宮正治「琉歌序説」(『文学』, 第40巻4号, 1972年, 82～94ページ); 嘉味田宗栄「琉歌の正体——たてよこの, かかわりから」(『文学』, 第40巻4号, 1972年, 95～105ページ)。
- 16) 東村「笑古氏の雨夜の寝ざめを読む」(『琉球新報』, 明治33年8月11日付)。
- 17) 当時の文学活動については, 岡本恵徳「近代の沖繩における文学活動」(『文学』, 第40巻4号, 1972年, 33～45ページ)。
- 18) 真境名安興「秋信録」(『琉球新報』, 明治32年10月25日～11月15日付; 『全集』第4巻, 109ページ)。
- 19) 宮里栄輝「追憶記」(『沖繩タイムス』, 1975年5月21日付)。
- 20) 真境名安興「秋信録」(『琉球新報』, 明治32年10月25日～11月15日付; 『全集』第4巻, 109ページ)。
- 21) 同上書, 110～2ページ。
- 22) 比嘉政夫『沖繩からアジアが見える』, 岩波書店, 1999年, 63～106ページ。
- 23) 伊波普猷「真境名君の思出」(伊波普猷, 前掲書, 1976年, 169ページ)。
- 24) 真境名安興「蔡温の産業政策」(『全集』第3巻, 464～7ページ); 真境名安興「蔡温の林政及農政上の施設」(『全集』第4巻, 3ページ)。蔡温は久米村に生まれ, 中国への留学後の1728年と三司官となり, 農業・林業・土木・治水などに大きな業績を残した。蔡温はまた, 沖繩史では初めて『自叙伝』を残している。高良倉吉『おきなわ歴史物語』, ひるぎ社, 1984年, 113～24ページ。
- 25) 真境名安興「蔡温の林政及農政上の施設」(『全集』第4巻, 10～3ページ)。
- 26) 真境名安興「蔡温時代の林政」(『全集』第3巻, 205ページ)。
- 27) 真境名安興「蔡温の林政及農政上の施設」(『全集』第4巻, 8～10ページ)。
- 28) 仲吉とその著書『杣山制度論』については, 拙稿「仲吉朝助の勸農論——沖繩農業研究の端緒」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第36号, 2007年, 145～71ページ)。
- 29) 菊山正明「杣山問題」(沖繩県編『沖繩県史 別巻 沖繩近代史辞典』, 沖繩県, 1977年, 339ページ)。

- 30) 真境名安興「蔡温時代の林政」(『全集』第3巻, 199～203ページ)。
- 31) 拙稿「謝花昇の農業思想——沖縄と近代農学の出会い」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第35号, 2006年, 25～54ページ)。
- 32) 名嘉正八郎, 前掲論文, 1976年, 43ページ。
- 33) 高橋による振興計画については, 大城肇「沖縄経済自立論の源流」(『琉球大学経済研究』, 第78号, 2009年, 20～3ページ)。
- 34) 伊波普猷「真境名君の思出」(伊波普猷, 前掲書, 1976年, 169ページ)。しかし伊波によれば, この頃も知事の訓辞や祝辞や中央への正式な文書などは, 真境名の手で起草されていたようである。
- 35) 名嘉正八郎, 前掲論文, 1976年, 43ページ。
- 36) 富島壮英「解題」(『全集』第1巻, 456～8ページ)。
- 37) 原田貞吉「沖縄一千年史が世に出るまで」(『琉球新報』, 1952年9月8日付)。
- 38) 比嘉春潮「沖縄一千年史の第四版刊行に当たりて——真境名氏の思い出」(『沖縄新民報』, 1952年10月31日付); 比嘉春潮『比嘉春潮全集』第2巻, 沖縄タイムス社, 1971年, 227ページ)。
- 39) 東恩納寛惇「真境名笑古を憶う——沖縄一千年史の著者(1)」(『琉球新報』, 1952年11月13日付)。
- 40) 富島壮英「県史編纂史料(沖縄県大正4年)に就いて」(『沖縄県図書館協会誌』, 第7号, 1976年, 48～58ページ)。
- 41) 「大味知事の王様振り(一)(二)(三)(四)(五)(六)」(『琉球新報』, 1915年1月12日～17日付)。
- 42) 高良倉吉「解題」(『全集』第2巻, 琉球新報社, 1993年, 438ページ)。
- 43) 戦前の沖縄史研究では, その多くが近代以前を対象とすることが多く, 近代沖縄史研究の主要なものとしては, 真境名による『沖縄現代史』と太田朝敷『沖縄県政五十年』(おきなわ社, 1932年)がある程度である。太田については, 拙稿「太田朝敷の地域発展論——沖縄の「独立自尊」をめぐる」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第40号, 2009年, 135～74ページ)。
- 44) 真境名安興『沖縄現代史』(『全集』第2巻, 93～4ページ)。
- 45) 沖縄では学校が「大和屋」とよばれ, 学校を大和化の中心機関としてとらえていたため, 就学を積極的に拒否していたとも考えられる。近藤健一郎『近代沖縄における教育と国民統合』, 北海道大学出版会, 2006年, 58～82ページ)。
- 46) 比嘉春潮「年月とともに」(比嘉春潮『比嘉春潮全集』第4巻, 沖縄タイムス社, 1971年, 187ページ)。
- 47) 同上書, 191～2ページ)。
- 48) 浅野誠『沖縄県の教育史』, 思文閣出版, 1991年, 134～67ページ)。
- 49) 太田朝敷『沖縄県政五十年』, おきなわ社, 1932年, 70～118ページ)。
- 50) 同上書, 71～2ページ)。
- 51) 拙稿, 前掲論文, 2009年, 135～74ページ。当時は沖縄人意識の形成をめぐる沖縄教育が揺れ動いた時期であった。照屋信治『沖縄教育』にみる「沖縄人」意識の形成——1910年代の親泊朝擢の言論に着目して」(『歴史学研究』, 第876号, 2011年, 1～19ページ)。
- 52) 真境名安興『沖縄現代史』(『全集』第2巻, 138ページ)。
- 53) 東恩納寛惇「真境名君の大著 不朽の沖縄一千年史」(『沖縄新民報』, 1952年6月25日付)。
- 54) 比嘉春潮「沖縄一千年史の第四版刊行に当たりて——真境名氏の思い出」(『琉球新民報』, 1952年10月31日付; 比嘉春潮『比嘉春潮全集』第2巻, 沖縄タイムス社, 1971年, 227～8ページ)。
- 55) 島袋全発「琉球学の大百科辞典——本書を措て他になし」(『沖縄新民報』, 1952年6月25日付)。
- 56) 比嘉春潮「沖縄歴史研究あれこれ」(比嘉春潮『比嘉春潮全集』第2巻, 沖縄タイムス社, 1971年, 247ページ)。
- 57) 富島壮英「解題」(『全集』第1巻, 465ページ)。
- 58) 豊見山和行「解題」(『全集』第3巻, 522～4ページ)。
- 59) 『全集』第3巻, 3～4ページ, 5ページ, 16～9ページ, 22～3ページ, 25～6ページ, 36～53ページ, 60ページ, 77～8ページ, 102～6ページ, 124～7ページ, 128～30ページ, 141～4ページ)。
- 60) 琉球方言については, 内間直仁『琉球方言とウチ・ソト意識』, 研究社, 2011年)。
- 61) 拙稿「伊波普猷と「沖縄学」の形成——個性と同化をめぐる」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第42号, 2010年, 5～7ページ)。

- 62) 伊波普猷「中学時代の思出——この一篇を恩師下国先生に捧ぐ」(伊波普猷, 前掲書, 1975年, 360～1ページ)。
- 63) 栗国恭子「〈笑古漫筆〉における真境名の視点」(『笑古ニュース』, 第3号, 1992年, 4～5ページ)。
- 64) 拙稿, 前掲論文, 2011年, 14～46ページ。東恩納の手法が継承されたとはいえないものの, その手法が検討の対象になったといえる。
- 65) 『全集』第3巻, 19～22ページ, 62～3ページ, 87～8ページ, 97～8ページ, 101～2ページ, 117～8ページ, 135ページ, 171ページ。
- 66) 田名真之「琉球家譜の成立とその意義」(『沖繩史料編集所紀要』, 第4号, 1979年, 1～32ページ); 田名真之『沖繩近世史の諸相』, ひるぎ社, 1992年, 95～196ページ; 小熊誠「沖繩の家譜」(『アジア遊学』, 第67号, 2004年, 84～94ページ)。
- 67) 白鳥芳郎「沖繩本島に残存する家譜——沖繩調査ノートと資料」(『上智史学』, 第13号, 1968年, 48～91ページ)。沖繩の家譜の分析については, 虎頭民雄「琉球「金姓家譜」考」(『鹿児島県立短期大学紀要』, 第13号, 1962年, 1～12ページ); 新城敏男「八重山の家譜覚書」(『沖繩文化研究』, 第9号, 1982年, 228～82ページ); 梅木哲人「久米島の諸家家譜記事の編年」(『沖繩文化研究』, 第10号, 1982年, 39～118ページ); 小川順敬「久米島の家譜にみる家の継承と養親」(『駒沢大学文化』, 第12号, 1989年, 83～119ページ); 小川順敬「久米島の家譜にみる婚姻」(『駒沢大学文化』, 第13号, 1990年, 119～28ページ); 山城彰子「家譜資料にみる近世琉球における土の離別——女性に焦点をあてて」(『琉球アジア社会文化研究』, 第13号, 2010年, 109～43ページ)。
- 68) 『全集』第3巻, 30～2ページ, 149ページ, 154ページ, 155ページ, 158～9ページ, 160ページ, 163～4ページ, 170ページ。
- 69) 真境名安興「古地図より見たる首里」(『沖繩朝日新聞』, 1917年7月不詳; 『全集』第3巻, 247～51ページ); 真境名安興「再び古地図より見たる首里」(『沖繩朝日新聞』, 1917年月日不詳; 『全集』第3巻, 251～3ページ)。
- 70) 東恩納寛惇「首里古地図の作製年代に就いて——真境名笑古君に質す」(『沖繩朝日新聞』, 1917年月日不詳; 琉球新報社編『東恩納寛惇全集』第6巻, 第一書房, 1979年, 612～20ページ)。
- 71) 真境名安興「三たび首里の古地図に就て——東恩納文学士に答ふ」(『沖繩朝日新聞』, 1917年月日不詳; 『全集』第3巻, 258～60ページ)。
- 72) 東恩納寛惇「首里古地図に就て——真境名君の答に答ふ」(『沖繩朝日新聞』, 1917年月日不詳; 琉球新報社編『東恩納寛惇全集』第6巻, 第一書房, 1979年, 621～3ページ)。
- 73) 真境名安興「四たび首里の古地図に就て——東恩納文学士に答ふ」(『沖繩朝日新聞』, 1917年月日不詳; 『全集』第3巻, 263～5ページ); 真境名安興「五たび首里の古地図に就いて——東恩納文学士に答ふ」(『沖繩朝日新聞』, 1917年月日不詳; 『全集』第3巻, 265～7ページ)。
- 74) 東恩納寛惇「首里古地図の作成年代につき追補」(『文化沖繩』, 第3巻5号, 1951年; 琉球新報社編『東恩納寛惇全集』第6巻, 第一書房, 1979年, 624～6ページ)。
- 75) 同上書, 624ページ。
- 76) 真境名安興『沖繩一千年史』(『全集』第1巻, 247ページ)。
- 77) 明治以前の表記については, 薩摩軍の侵攻を琉球で観察した『喜安日記』では「琉球破却」, 18世紀初頭の『中山世譜附巻』では「遣使征伐」, 初回の編集が18世紀中期の『球陽附巻』では「来伐本国」と表現されている。『中山世譜』では琉球と薩摩との関係が, 中国に知られないように附巻にまとめられている。『球陽』も薩摩関係の記録は附巻に集めている。宮城栄昌『沖繩の歴史』, NHKブックス, 1968年, 89～98ページ; 琉球新報社・南海日日新聞社編『薩摩侵攻400年 未来への羅針盤』, 琉球新報社, 2011年。
- 78) 真境名安興『沖繩一千年史』(『全集』第1巻, 247～8ページ)。
- 79) 『全集』第1巻, 308ページ; 『全集』第2巻, 7ページ; 『全集』第3巻, 175～84ページ。
- 80) 薩摩の琉球侵攻の目的は, 従来まで島津氏による琉球の進貢貿易の独占にあるとされていたが, 現在では幕府の琉球を介した対明貿易復活への期待と, 島津氏の大島割譲などにあったという見方が出ている。新城俊昭『高等学校 琉球・沖繩史(新訂・増補版)』, 東洋企画, 2001年, 79～82ページ。薩摩と琉球の関係を贈与儀礼からみた研究に, 麻生伸一「近世中後期の贈与儀礼にみる琉球と



- 日本——琉球国王・薩摩藩主・江戸幕府將軍の関係をめぐって」(『日本史研究』, 第578号, 2010年, 1～28ページ)。
- 81) 真境名安興「沖縄農政[史]一斑」(『全集』第3巻, 444～50ページ)。
  - 82) 同上書, 446ページ。
  - 83) この問題意識は謝花と類似である。拙稿, 前掲論文, 2006年, 25～54ページ。
  - 84) 真境名安興「沖縄農政[史]一斑」(『全集』第3巻, 446～7ページ)。
  - 85) 同上書, 447ページ。
  - 86) 同上書, 447ページ。
  - 87) 新城安善「沖縄研究の書誌とその背景」(沖縄県編『沖縄県史 第6巻各論編5文化 下』, 沖縄県, 1975年, 1006～11ページ)。柳田による南島への関心については, 柳田国男著/酒井卯作編『南島旅行見聞記』, 森話社, 2009年; 酒井卯作『柳田国男と琉球——『海南小記』をよむ』, 森話社, 2010年。
  - 88) 真境名安興「南島研究の発刊について」(『全集』第3巻, 437～8ページ)。
  - 89) 屋嘉比取ほか編『沖縄・問いを立てる1 沖縄に向き合うまなざしと方法』, 社会評論社, 2008年, 120～1ページ。
  - 90) 真境名安興『沖縄教育史要』(『全集』第2巻, 322ページ)。
  - 91) 新里恵二「解説」(新里恵二編『沖縄文化論叢 第1巻 歴史編』, 平凡社, 1972年, 29～31ページ)。
  - 92) 高良倉吉「解題」(『全集』第2巻, 442ページ)。
  - 93) 向象賢については, 拙稿, 前掲論文, 2011年, 16～22ページ。
  - 94) 真境名安興『沖縄教育史要』(『全集』第2巻, 366ページ)。
  - 95) 「羽地仕置」は向象賢著・島袋源一郎翻刻『仕置』(沖縄郷土協会, 1935年)として, 全33ページにまとめられている。
  - 96) 東恩納寛惇, 前掲論文(『琉球新報』, 1952年11月13日付)。
  - 97) 伊波普猷「真境名君の思出」(伊波普猷, 前掲書, 1976年, 169ページ); 拙稿, 前掲論文, 2010年, 11～6ページ。
  - 98) 比嘉春潮「宮古史伝に序す」(比嘉春潮『比嘉春潮全集』第2巻, 沖縄タイムス社, 1971年, 230～2ページ)。
  - 99) 高良倉吉「歴史学」(沖縄県編『沖縄県史 第5巻各論編4文化 上』, 沖縄県, 1975年, 864ページ)。
  - 100) 東恩納寛惇「歴史的遺物保存に就いて識者に協る(二)」(琉球政府編『沖縄県史 第19巻資料編9新聞集成(社会文化)』, 琉球政府, 1969年, 397ページ)。
  - 101) 高良倉吉「歴史学」(沖縄県編『沖縄県史 第5巻各論編4文化 上』, 沖縄県, 1975年, 867ページ)。
  - 102) 東恩納寛惇「真境名笑古を憶ふ」(東恩納寛惇, 前掲書, 1978年, 288ページ)。
  - 103) 安良城盛昭・新里恵二対談「沖縄歴史研究のこれまでと今後」(『沖縄タイムス』, 1967年10月30日付)。
  - 104) 金城正篤・西里喜行「『沖縄歴史』研究の現状と問題点」(新里恵二編『沖縄文化論叢 第1巻 歴史編』, 平凡社, 1972年, 86～91ページ)。
  - 105) 「年譜」「著作目録」(『全集』第4巻, 105～17ページ)。

## Ankou Majikina and the Development of Okinawa Historical Study

Nobuhisa NAMIMATSU

### Abstract

Ankou Majikina (1875–1933) is the representative researcher of the Okinawa history in modern Okinawa. He wrote many studies, and “the complete works” over all Vol. 4 are published. The masterpiece in his writings is “Okinawa 1,000 years history”. This book contributed to the formation of the Okinawa historical study. However, the characteristic of his results of research is not clarified. This article follows his career and thinks about the process when his history was formed.

Majikina was interested in the history since a junior high school. He criticized Okinawa about the problem of the commonage. He was interested in the history of administration of forestry and the agricultural administration through this problem. He was engaged in prefectural history editing, and wrote two books; “Okinawa contemporary history” and “Okinawa 1,000 years history”. The former was the pioneer study achievements that handled Okinawa modern history. The latter became a reference book or the encyclopedia when we studied the Okinawa history, but it is said that this book wrote a historical fact, not the essay on history.

However, Majikina had historical view. The characteristic of his historical study had five points. (1) deep interest in dialect of Ryukyu, (2) multifaceted viewpoint, (3) use of precious historical materials, (4) quotation of the family tree, (5) hearing investigation from aged persons. From these points, we understand his historical view. He leaves from a current critical mind and elucidates the history of Okinawa in a general viewpoint. He made much of the main constituent and native district of the history.

When Kanjun Higaonna (1882–1963) studied the Okinawa history, he had it assuming a history theory. In contrast Majikina did not have an opportunity to learn a history theory. Majikina formed Okinawa historical study by dealing with historical materials closely.

**Keywords:** Ankou Majikina, Okinawa historical study, Historical view, “Okinawa 1,000 years history”, Kanjun Higaonna